資　料

“諸国民の富”発刊２百年記念から

見　野　貞　夫

本年はスミスの“諸国民の富”発刊から２百年をかぞえる。資本制経済でにつまる市民社会の解剖学が科学として成立してからほぼ２百年とは案外に経済学は若い。経済学の諸断片は人間史とともに古いけれども，システムをもった構成としてはそう古くはない。経済学の自然発生的な形態がいわゆるブルジョア経済学であること，人間史の自然発生的形態が私有社会であるのと同じであり，ブルジョア経済学は，この私有に没入した仕方で何らかの解析をこの社会に与えていく。スミスの科学もブルジョア経済学として以外には発生しようもなかった。

そのブルジョア経済学も今日からほぼ百年前，つまりスミスからも百年ほど後に，私有にどっぷりつかった仕方，あるいはブルジョア的性格プロパーのものとしては，すでに科学性を失うものだと理論的破産の宣告をうけている。その宣告このかた，新しい経済学の抬頭，開発，古いものの批判，継承，摂取，更には新しい理論の現実史への実現定着化など，文字どおり，目まぐるしい激動の百年がつづいてきた。経済学の成立から破産までの百年はあまりにもみぢかく，うたかたの感にたえないが，またもう百年の事件はあまりにもはげしくゆたかである。それだけにまた，理論は千里をみとおせるが，その現実史的進歩は牛歩のおそきと思わざるをえない。

現実史の内容となり，人びとの日常的血肉となることではじめて，理論は自分の使命をはたしたことになるとすれば，ブルジョア経済学とくにその科学的系譜としての古典経済学はまだまだ現代に力強く生かせて使命をまっとうさせねばならないわけである。理論的に破産したからといって，史的定着化の必要性がなくなるのでない。とりわけスミスは現代にも通用するそうした思想家の一人である。スミスの説いた市民社会論や内的情感を人びとがわがものにしたならば，たとえば，日本の民主主義

もはるかに前進をとげるのではないかとも想像してみたくなる。それほどスミスはみずみずしい。スミスが古くなったとはとんでもない錯覚である。

理論的にいっても，新しいものが古いものの批判的継承のうえに成りたつかぎり，科学の系列につらなる見解は不滅であり，それこそ勲業不朽である。私有を不動とみるブルジョア性格を脱皮しさえすると，その前進は無限である。ブルジョア性格の破産宣言はそれをかぶっていた経済学を永遠に生かす。あるいはブルジョア経済学のそれらしい固有な発展が当初の性格をぬぎすてるともいえよう。

スミスのスミスらしい発展は私有を不動とする限界をかなぐりすてて，発展の展望をひらき，科学のなかに生きる道をば確実なものにするはずである。

スミス研究では世界の群をぬくわが国の理論水準からすると，ソビエトロシアのスミス研究文献は手本とできるものではない。とくに，マルクスふうにほりさげた問題点や理論局面では確実にそうであろう。また，スミスみずからの関係文書の発刊も西ヨーロッパやアメリカにずっとおくれ，ものによっては，わが国にも及ばぬものがある。だが，スミス研究の材料のひろさや資料のゆたかなこと，または実証的研究などではなお，参考になる方向（アプローチ）もけっしてすくなくはない。また問題点の指摘も，少数の論者によるものの，研究者を啓発することも多い。

幸い，本年の2百年を記念して，いろいろなスミスに関する論文がでている。このなかから2，3のものをとりあげて，ここに内容を紹介してみたい。

以下の論文は；

А. В. Аникин: Адам Смит—классик политической экономии, Вестник Московского Университета, No. 3 1967.

А. Назаров : Теоретическая система Адам Смита (к 200 летию со дня выхода в свет Исследования о природе и причинах богатства народов), Экономические Науки, No. 5 1976.

Вл. Афанасьев: Противоречия теории А. Смита и его экономическое учение марксизма, Вопросы Экономики, No. 3 1976.

А. Аникин: Адам Смит и русская экономическая мысль, Вопросы Экономики, No.3 1976.

Н. Цаголов : Богатство народов А. Смита и современность, Экономические Науки, No. 1 1977.

ついでに，ほとんどもっぱら英米の関係スミス文献を1976年度を主として，その前後を含めて，スミス個人のプロパーな文献のリプリント，関連著書，そして論文といった順序でとりあげて，めぼしいものを列挙すると，次のようになるだろう。

スミスの新版全集については， Glasgow Edition, The Works and Correspondence, Adam Smith, 6vols+2vols としてその部分がすでに発刊，他のものも近からず陽の目をみるはずである。

The Theory of Moral Sentiment (vol.I), ed. by D. Raphael D.D.& Macfie A.L., pp.750, 1976 6

An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations (vol.II) ed. by Campbell R.H., Skinner A.S. & Todd W.B., 2vols,pp. 1100, 1976 3

The Correspondence of Adam Smith (vol.III),ed. by Masser E. & Ross I.R.,pp. 460, 1976 Aut.

Smith's Lecture on Jurisprudence (vol.IV),ed. by Meek R.L, Raphael D.D. & Stern P., pp.668, 1977 Spr.

Essay on Adam Smith (app.vol.I), ed. by Skinner A.S. & Wilson T., 1976 3

未発刊部分としては，

Essay on philosophical Subjects (vol.V),ed. by Wightman W.P.D.
Lecture on Rhetoric (vol.VI),ed. by Bryce J.C.
The Life of Adam Smith (app.II),by Ross I.S.
が残っている。

* * *

Lindgren J.R. : The Social Philosophy of Adam Smith, pp.164+XV, 1973

Ivens M. (ed) : Prophets of Freedom and Enterprise, The Collection of Studies on Smith, Mill J.S., Marshall, Keynes, Friedman, Popper, Hayek, et al., pp.88, 1975

Napoleonic C. : Smith, Ricarde, Marx (tr. by I.M.A.Gee) pp.198, 1975

O'Brien D.P. : The Classical Economists, Development of Economic Theory from Smith to J.F.Cairnes, pp.306, 1975

Hut W.H. : A Rehabililtation of Say's Law, 1974 12

200 Jahre Adam Smith "Reichtum der Nationen", Internationales Kolleguium von 30.9 bis 1.10 1976 in Halle (D.D.R) SS.450, 1976

Meek R. : Smith, Marx and After, pp.200, 1977

Reckenwald H.C. : Adam Smith, Sein Leben and Sein Werk , SS.312, 1976

Reisman D.A. : Adam Smith's Sociological Economics, pp.274, 1976 2

Robbins L. : Political Economy Past and Present, A review of leading Theories of Economic Policy, 1976

Skinner A.S. : Adam Smith and Role of the States, pp.28, 1976

Thal P.(Hrsg.) : Adam Smith gestern and Heute, 200 Jahre "Reichtum der Nationen"SS, 300, 1976

Wilson T. & Skinner A.S. : The State and the Market, The Selection of the Proceedings of the Conference held at the Univ. of Glasgow in April 1976 to celebtated the bicentuary of Smith's great works, pp.256, 1976 Aut.

論文としては：

Lamb P. : Adam Smith's Concept of Alienation, *Oxford Economic Papers* vol.25 (2) July 1973

Skinner, Meek : The Development of Adam Smith Idea on the Division of Labour, *Economic Journal* 83, 1973

Berry L.J. : Adam Smith's *Consideration* on Language, *Journal of Historical Ideas,* vol.XXXV(1), Jan.-mar. 1974

Lamb R.B. : Adam Smith's System : Sympathy and Self-Interest, J.H.I. vol.XXXV(4), Oct-.Dec. 1974

Megill A.D. : Theory and Experience in Adam Smith, J.H.I. vol.XXXVI(1), Jan Mar. 1975

Myers M.L. : Adam Smith as Critic of Ideas, J.H.I, vol.XXXVI(2) Apr.-Jun.

Reckenwald H.C. : Adam Smith, Heute and Morgen, *Kyklos* 28 (1) 1975

Richardson G. : Adam Smith on Competition and Increasing Returns, in Skinner & Wilson (ed.): Essay on Adam Smith, 1975

Skinner A.S : Adam Smith : Science and Role of the Imagination, in Told W.B. (ed.), Hume and Enlightment ; Essay in Honour of E.Mossner, 1975

West E.G. : Adam Smith and Alienation : Rejoinder, O.E.P. vol.27 (2) 1975

Gray A. : Adam Smith, *Scottish Journal of Political Economy,* vol.XXIII(2). Jun. 1976

Hutchison T.W. : The Bicentuary of Adam Smith, *Economic Journal,* Vol.86 (343), Sept. 1976

Johnson H.G. : The Relevance of the *Wealth of Nations* to Contemporary Economic Policy, S.J.P.E. Vol.XXIII(2) Jun. 1976

O'Brien D.P. : The Longevity of Adam Smith's Vision : Paradigms, Resehch Programmes and Falsifabilty in the history of Economic Thought, S.J.P.E. vol.XXIII(2),Jun 1976

Skinner A.S. : Adam Smith and American Economic Community : An Essay in applied Economics, J.H.I.vol.XXXVII(1), Jan.-Mar. 1976

————: Adam Smith : The Dcvelopment of a System, S.J.P.E. vol.XXIII(2). June 1976

White D.A. : Adam Smith's Wealth of Nations, J.H.I. vol.XXXVII(4) Oct.-Dec. 1976

なお，すこし古いが参考すべきところでは，

Morrow H. : The Ethical and Economic Theories of Adam Smith, New York, 1921

Bitterman : Adam Smith : Empiricism and the Law of Nature, *Journal of Political Economy,* 48 (1940) July—Sept.

Rosenberg D. : Adam Smith, Consumer Testes and the Economic Growth, J.P.E., 1968 (76) May—Jun.

があげられよう。

* * *

さて以下，この順序で紹介論文をとりあげるが，ナンバーを付す。

1 マルクス主義者とブルジョア経済学者を含めて全世界が"諸国民の富〔以下W.N.〕"出刊2百年という記念すべき年を迎えるわけだが，両者のアプローチは裁然と相異となっている。前者にとっては，スミスは古典経済学の著名な代表者として，マルクス主義の源泉の一つであり，更には，レーニンのいう通り，先進ブルジョアジーの偉大なイデオログである。そして，かれの学説も，ブルジョアジーが社会発展の担い手にして労資間の階級的敵対がいまだ表面化していなかった間は，このかぎりにおいて客観的に進歩的であり，科学的であったのである。これに反して，すでに過去のフィギュアーとしてとらえ，経済思想の史的段階に位置づけるものの，それ自体はもう陳腐化したものと考え，先進的側面をみないで，その俗流的側面を固定化する——これがブルジョア経済学のスミス評価の特徴である。

ここでスミスの所説をとりあげてみたいのは，18世紀末から19世紀にかけて，ロシアの経済思想にそれが影響を与えているからである〔これは一般的な問題意識であり，その意識を実証するモノグラフィをここで与えるわけではないようだ〕。

グラスゴー大学におけるかれの弟子であるがゆえに，また何がしかのスミス研究者とも目せられるロシア人が二人(ふたり)いる。いずれもモスクワ大学の法律学教授であったデスニツキーとトレチャコフである。もちろん，当時，科学としての経済学や大学の教授項目としての経済学はいまだなかった。当時ロシアではさきの時期に〔W. N.〕は教育のある人びとには周知のことであり，19世紀はじめには飜訳もでるというぐあいであった。とくにスミスのブルジョア民主主義思想のいちぢるしいのはヂェカブリストの考え方であり，チェルヌィシェフスキーの諸作品にこれはみいだされるが，それを大変に高く評価したのがほかならぬマルクスであった。

ところで，(W. N.) のロシア語版はといえば，合わせて8回も出刊をみており，そのうち4回は，革命前である。ただし，選集本類や論文をのぞいてである。この方向のソビエト研究者としては，アファナシェフ (В. С. Афанасьев)，リャシチェコ (П. И. Лященко)，ローゼンベルグ (Д. И. Розенберг)，シュタイン (В. М. Штейн) その他があげられるだろうが，ロシアとスミスの関係については，アレクセーフ (М. П. Алексеев)，モロゾフ (Ф. М. Морозов)，ブリューミン (И. Г. Блюмин) などがきわだっている。

1723年，スコットランドの小都市カーコディに生れたスミスは，グラスゴーやオクスフォードで都市の教育をうけ，当時の知識階級にふさわしく，古代語をマスターし，更に，フランス・イタリアの外国語にも通じていた。また，イギリスの哲学者，ホーブスやベーコン，更にロックの影響をうけたが，とくにスミスはニュートンの作品を高く評価し，長年の友ヒュームがそこから輩出したスコットランド哲学派の見解を発展させていった。フランスの啓蒙哲学，たとえばモンテスキュー，ヴォルテール，ディドロなどの見解はかれの世界観形成にすくなからず寄与した。

経済学においては，ペティをはじめとする多くのイギリス古典学派の諸理論を一般化し，体系のなかに位置づけてこれをスミスは摂取した。同時に，重商主義にはきわめて批判的であり，それを主要な任務の一つとしたほどである。というのも，かれらときたら，経済の客観法則を軽視し，国民の経済への干渉を主張するのだが，まさにその干渉や経視を，スミスは，ケネー，チュルゴーなどと，ともどもに自然法思想に立却して反論したからである。

48～51年，エディンバラーでさまざまな社会科学を対象にした公開講議をおこなった。51年，グラスゴー大学論理学教授になり，後には道徳哲学の教授に転じた。いうまでもなく，グラスゴーはスコットランドの産業中心地だっただけに，経済生活の豊富な観察材料を，幸いスミスに与えた。59年には，哲学の主著〝道徳情感論〟

（以下　同じく M. S. と略す）をだす。この作品は，先進的な民主主義思想を含み，かれの思想形成の諸段階で重要な契機となる，すべての人が平等たるべく反封建的思想を提示するものであった。

64～77年には，イギリス貴族の子弟を伴いフランスにわたり，そこに滞在する。彼地で著名な哲学者や経済学者の知巳をうる。後，カーコディに帰り６年以上もの間，問題の経済学作品（W. N.）の仕上げに精力を傾注した。73～75年，ロンドンで作業を終り，76年３月，やっとこの著書は陽の日をみた。はじめ，このぶ厚い本は人目をひかないまま，ただ小数の若干人がこれを評価したにすぎない。だが，間もなく，状況はかわり，そこに提示されたものがするどい社会経済問題だっただけに，読者の関心をあつめて，内容の科学性とあいまって，後には，経済学の古典としての名声を確立していった。すでに，この作品は，スミスの生存中に５版を重ね，アイルランドでも出刊をみ，更に，独，仏，またオランダ各語の訳著も出現した。

発刊からしばらくして，学究生活の起点となったエディンバラに来てスミスはスコットランド税関高官をつとめたが，その後，90年ここに没した。この頃，すでにかれは有名な経済学者としての定評を博していた。この作品ではじめて，18世紀の社会思想を完結する金字塔の一つとして，経済学の体系ある叙述，マルクスの表現をもってすれば，ブルジョア社会の内的生理学へのしんとうがうがうちたてられたのである。

周知のとおり（W. N.）は５部から成っていて，最初の２部は理論であり，分業からはじまって社会的労働の重要な増加因を述べたり，用具の発明や応用を分業と結びつけ，その例示をピン製造業にとって，労働者の専門化と，かれらの間の作業分割が生産物を何倍かに高めるゆえんを考察する。また，これらの編の冒頭をかざる何章かは価値論を含み，これを支出労働で決定づけ，資本による賃労働の搾取といった本質的理解にまでたち向う。また主だった階級の所得——労賃・地代・利潤をばらばらに考察している。第２編は資本概念をいっそうきびしく規定し，資本類型を折出している。資本蓄積論のなかには，スミスの社会的再生産理論の要素が含められているし，ここで生産的—不生産的労働の議論を展開するのだが，これは今日なお，経済学上の争点の一つである。

最初の２編を補足する他の３つの編はいわばスミス理論の附録であり，一つは歴史，もう一つは政策である。第３編は封建期や資本主義生成期のヨーロッパ経済の発展とか，資本主義発生の合法則性とかが議論される比較的小編であるけれども，これに反して，第４編はスペースが大きく，学説の歴史叙述と批判，とくに重商主

義への反駁を包含する。重農主義(フィジオクラシー)にかれは基本的に同意を示すものの，なお見解を異にする点もすくなくはない。叙述にもっともぶ厚いスペースを与えるのは第5編であり，国家の収入つまり財政にかかわっている。これをもってスミスは，分業の社会的結末，教育政度とか宗教の役割，イギリス帝国・植民地などの問題に関して，社会的政治的見解を大担かつ卒直に批瀝した。

経済政策では，最大限に自由な活動を資本制経済の盲目法則に託して，国家の干渉がここにはいらないようにと，かれは提唱する。経済的自由と政治的自由を結びつけ，ブルジョア民主主義を駆いあげた点で反封建的というべく，進歩的であった。その経済政策プログラムを構成する要素はどうかといえば，具体的には次のとおりである。すなわち，労働移動の自由，この自由を妨害する封建的遺制の払拭，封建的土地経営を分割解消する土地売買の自由，営業の自由，国内商業の自由，企業者課税の軽減，外貿の自由。最後のものは重商主義批判と対となっているだけに，この自由をかちとるべく，その論調ははげしい。

スミスの経済学方法論に関する成果も逸すべからざる大きな科学的成果ではある。論理的抽象の仕方を適用して，経済過程にふかみに貫串し，その発展の内的論理を客観的なものとして解きあかす。しかし多くの場合，資本制市場の表象的見解にとらわれて現象を叙述するのにかぎってしまう。マルクスがいうように，ひっきりなしに，動揺・憧着・矛盾するスミス理論は何といっても幼稚と評すべく，たしかに一面では，経済範疇の内的関連をフォローするものの，同時に他面では，競争現象に幻惑されつつ科学には何としてもほど遠い考え方で問題をだし，無神経にもさきの科学的仕方と併列している。いうなれば，生理学とカタログづくりといった二とおりの手法が安易に同居するばかりか，相互に移行し合ってたえず矛盾するのだ。そしてスミスのこの二重性を，課題の二重性ゆえに正当なのだともマルクスは評定する。経済上の知識を一つのシステムにまとめようとするにさいして，かれは，内的関連を抽象的に分析するにとどまらず，ブルジョア社会を記述し概念や諸規定の細目をきわめようとすらする。二重性があったり，首尾一貫性を欠くのはむしろ，概念のいっそうの発展にとってきわめて大切なのであり，リカードなどの科学的フィギュアーだけではなく，俗流経済学者もかれに依拠しているのは明白である。

その二重性は何よりもまず，価値論において手にとるように明らかである。かれの功績は，それ以前の長い間にわたってイギリス古典経済学の中核にあった労働価値説を分析の基礎にすえたことである。この原理がいまでも，ブルジョア論者のほうからするどく攻撃をうけている。たとえば，その一見解 (J. F. Bell : A History of

Economic Thought, New York 1953) によると，価値論へのスミスの寄与はといえば，問題をあかすよりは，あいまいにしてしまう点にあり，誤謬，不正確，矛盾こそはスミス議論の軸であると。

スミス価値論に重大な欠陥があるというのはなるほど正しいが，この矛盾は，マルクスの評定にもうかがわれるように，法則的であり，経済理論としてもそれなりに実のりあるものだ。スミスは起点となった簡単な価値定式から何とかのがれようとした。というのも，この定式は自由競争下の資本主義のもとでは，商品交換や価格形成の現実システムに共通するにすぎないことが明らかだからである。ここでかれはときがたい矛盾におちいる。この原因を，マルクスはスミス（とくにリカード）の資本への歴史観が欠落していて，労資関係を永遠にして唯一のものと考えた点に求めた。資本主義のほかに，スミスが知っていたのは原始的社会状態だけだといいつつも，かれが科学のふかみから良心的に価値問題にアプローチしたとして，マスクスは次のようにいった。すなわち，スミスの場合，使用価値がどのようなものであろうとも，価値をつくるのは普遍的な社会的労働，もっぱら必要労働量であると。スミスの価値論への寄与は鮮明である。

だがしかし，この価値論にもとづいて資本制経済の現実過程を解明できず，とくに労働と資本の交換を等価交換とみたり，利潤の均等化現象にとらわれてしまい，価値規定とこの複雑な過程との間の関連を発見できず，かれは，出発点からそれて，結局，価値が賃金や利潤を含めた生産費から構成されるとして，外観にとらわれたアプローチにおちこんでしまった。科学的分析を目ざしつつも，現象の外観に埋没したり脱却したり，両者の間を終始して，結局，スミスは，労働・資本・土地の所有者を，三つの平等な生産要因——つまり価値創造因とえがきだす不幸な史的先例をつくりだした。

スミスに特徴的なこの状況は分配論にもみうけられる。一面，労働価値説に立却して，ブルジョア社会の階級構造を正しくとらえ，利潤や地代を搾取所得と論定するが，しかし不十分さはまぬがれていない。すなわち，マルクスにさきだつすべての経済学者の例にもれず，かれもまた剰余価値を独自の範疇とみずに，ブルジョア社会の表面に現象する利潤・地代・利子などといった具体的な形態のままで観察する。とはいえ，価値論と結びつけた条流はかれの理論がもつ先進性を示すものではある。

他面，もう一つの条流はといえば，俗流・反科学的なものというべく，価値を賃金・地代・利潤の総計としてとらえる点である。実際，地代や利潤が価値を構成す

るのならば，それは価値控除たるとはいえぬはずである。労働・資本・土地という各生産要因は価値形成に関与して，上のような形態をもったそれぞれの分前を求めるというのがここでのスミス分配論である。これこそ19世紀のイギリス経済学者による〝資本の不可侵の権利〟論とはそうへだたっていない見解である。

価値を所得から構成して，スミスは各項目の所得自然率が一体どのようにしてきまるか——つまりいかなる法則で個別商品や総商品の価値が階級間に分配されていくかを研究し解釈した。この過程でかれは再び剰余価値論にたちもどる。その賃金論は現代でも注目に値するけれども，労働力商品として資本に売却されるといった性格に結びつく点の関係を理解していないかぎりでは，多くの場合，かれは不十分で何としても正しくはない。労働は一つの商品にしてその自然価格を有するとかれは説くが，その価格たるや，マルクスによる労働力価値決定と同じように，生活材料で決定づける。また利潤を監督や管理の対価として，独自の労働への賃金にすぎないとする考え方を反論して，利潤の大いさがもっぱら資本の大いさできまり，けっしてこの種の労働軽重できまるのではないと考えて，かれは利潤を搾取所得と論定する。したがって，この見解と，まったく逆のリスクへの資本家報酬という見解が相互にいきつもどりつ，仲よく同居しているといった工合である。

剰余価値の発生眞因をスミスが理解したのだとマルクスがいったところで，そのスミスのいうには，ただ私個人のもとにあるだけでもう，資本は，蓄積されて，そのうちいくばくかが，当然のことながら，働きものの人びとを雇用するのに使われる。資本はもともと，労働者に価値を付加せしめてその売却で利潤をえるのを目ざしてかれらに生活材料を供与することが任務であると。スミスは資本の発生過程を，それが生みだす諸関係の搾取的性格をみぬいていたけれども，だが，どうしたわけか，資本をいっそう具体的に分析するだんになると，初心のこの立場を忘れてしまうのである。

資本蓄積が経済発展の決定因だとみたスミスにとっては，蓄積を助けるものは国民に有利であり妨げるものは有害である。スミス在命中の初期産業革命には促進すべくたしかに根本問題であった資本蓄積は，その後，内在矛盾をあらわし対立をふかめ，またしても体制にとってアクチュアルな問題性格を再び恐慌期で鮮明にすることになった。

ケネーとともに，経済思想上はじめて，スミスは社会的再生産の基本モメントを考えようとした。レーニンの加えた注解の表現でいえば，スミスは生産物と生産物が交換されるといった重農主義にとって周知だった眞理をみとめただけでなく，社

会的資本や生産物構成部分がどのようにして価値補塡されるかの問題をも提示したが，他面，同時にこれまた有名なスミスドグマをだすことで，この分野における現実過程の分析を後のちまでも困難にしてしまったのである。そのドグマの核心とは，総生産物が価値として国民所得すなわち賃金労働者の所得（可変資本）と資本主・地主の所得（剰余価値）の合計に還元できるという点にあり，それでは生産の全段階で投入された生産財価値（不変資本）は度外視されてしまう。更には，この見解からすると，使用価値の形態だけでたんに消費用の商品としてのみ生産物はあらわれるにすぎず，生産用消費は完全にネグレクトされてしまう。最後に，蓄積を論じるさいにでてくる追加生産財への剰余価値部分の投下も論外にたつ。スミスのこうした欠点は後にシスモンディの再生するところになり，労資からなる社会があたかも当初から，発展をとどめてしまう克服しがたき障害をはめるといった誤った議論として，あだ花を咲かせようとするのである。

生産的労働者を雇う人はいっそう富み，召使を雇えばいっそうまずしくなると述べているように，スミスの蓄積論は生産的労働（不生産的労働）と結びついているが，このことは個人にだけではなく，国民全体にもあてはまるところからして，生産的労働に従わぬ人を最小限にし，生産を妨げ蓄積を何がしかすくなくする社会グループを低減するべく，封建的要素やこれと結託する官僚，軍人，教会をなくもがなの方向でかれは批判する。それは当時のブルジョアジーと労働者ともども，その発らつとした立場を表現したものである。こういう——首長・官吏・将校・陸海軍人は不生産的労働者。かれらは社会の下僕であり，他の人びとの労働生産物で扶養されている。この階層に属するものとして，もっとも重要な若干の職業の人たちがあげられる。つまり，聖職者，法律家，医師，作家，俳優，歌手，オペラ歌手，ダンサーなど。王や貴族なども非生産的なものとして，かれは科学的な大胆さと市民的勇気をふるってこう論断するかたわら，またイギリス政府の多くの政策面とくに植民地経営をもこっぴどく批判した。たとえば，インドを掠奪してきた強力にして貪欲な独占会社たる東印度会社や当時の大学制度を誰はばかることなく論難する。教育機関のあるものは長年間，寺院によって好まれてはきたが，いまではすでに反論ずみの理念なり陳腐な偏見を庇護すべて，恰好の隠れ屋になっていると。

スミスに特徴的なのは進歩性とヒューマニズムであり，資本主義を論じるさいにも，それを無条件に弁護しているわけではなく，むしろ，これが勤労者に壊滅的な作用をおよぼす傾向のあることをかれはみぬいていた。レーニンにしたがえば，18世紀の啓蒙主義や19世紀ロシアの啓蒙主義者のもとでは，新しい社会関係とその矛

盾は萌芽の状態にとどまり，利己心もブルジアイデオロギーならず，一般的善をもたらすものであった。この一般善をかれらは心から信じており，スミスもこれに例外ではなかった。かれは，勤労貧民にたいしていたく同情し可能なかぎりかれらには高い支払を提唱した。というのも，社会は大多数がまずしく不如意ならば，開花した幸福な状態とはいえないとかれは考えたからである。しかも自然法則からして労働者はまずしい状態にあるべく運命づけられるし，労働者の利益と社会の利益は結びついているとはいえ，かれらは社会の利益を熟考もしなければ，この利益と自分の利益との関連も理解もしないのだとスミスはみていた。

スミスにとってブルジョアジーは新興の進歩的階級であり，その利害は狭く一時的にとどまるのではなく，広く長期にわたるものである。雑階級出身のインテリゲンチャーであったスミスは資本家そのものには何ら共感を示していない。利潤はかれらを盲目的にそして荒れ放題なものにする。利潤のためならば，かれらは，たとえ社会に反逆しても，どんなことでもする用意がある。全力をしぼって商品価格をつくりあげ，労働力の価格をひきさげるのはかれらに特有な行為である。製造業者と商人はたえず自由競争をおさえ，社会に有害な独占をつくりだそうとする。がいして，製造業者はスミスにとって，進歩や国富増加の自然的かつ没個性的な手段である。かれがブルジョアジーに味方をするのもその利害が社会の生産力増加と一致するからである。この考え方は，スミスからリカードまで，ずっと一貫しており，ブルジョア古典経済学のもっとも重要な構成部分となっている。

経済学へのスミスの寄与は大きく，かれにあっては，経済学が占める領域が全体にはっきりしていて，他の多の科学とことなり，それは独自な研究対象と方法を具有した内的構造で存在する。しかも，スミスの経済学は，認識用具にとどまらず，階級闘争の用具として，更には，社会を発展させる動因でもあった。この理論を普及することは，消滅しつつある封建的生産関係を資本生産関係におきかえるべく，これを促進するとともに，かれの思想的足跡も18世紀末と19世紀初期の革命的社会運動のなかに多少とも明らかとなっていった。

2.〝諸国民の富〟という作品は25年の長きにわたる哲学・社会学・経済学の領域におけるスミスの研鑽の産物である。諸国民の富それ自体はスミスにさきだつ16～18世紀に，英・仏・イタリア・スペイン・ロシア，その他の諸国の哲学者経済学者がさまざまな局面で追求してきた理論上のお好みのテーマであった。その見解の大部分がすでに死滅してしまった古い学派の経済思想に，多方面の実際資料により

ゆたかにされ科学的に体系だてられた理論を対置し，また強くなったブルジョアジーの欲求に相反する考え方を解消し，それを高い水準に止揚する必要があった。

この作業課題をはたすために，スミスは理論の３構成（трилогия）をつくろうと企図した。その一つが社会組織の道徳的原理としての（M. S.）。第２が（W.N.）にして，社会の経済的基礎を叙事誌ふうな原則でとらえるもの。第３に，少数の資料からいかほど判断しようとも，かれは人間社会の理論と進歩の歴史を読者の判定にゆだねた。この作業をうまく十分にはたしきっていないにもかかわらず，かれがともかくこの（当時においてばかりではない）壮大な課題を解決したことは疑問の余地はない。百科全書的教養を有して，意識的なイデオロギーの偏見にとらわれなかったスミスにしてはじめて可能であった。マニュー期，手工業年代の経済学者だといえ，スミスが登場する以前には，何びとも科学をかくもふかく体系化する経験を有せず，誰もこの一般化の過程でこれほどきわだった発見をした人はいなかった。

スミス理論の体系（システム）問題で中心的なのは形式上は（W. N.）のもつ社会性格の論点であり，この論点こそ理論構成の起点であり終点である。この（W. N.）にまた三レベルにおいて組成と整序（シエマー）化がはっきりとある。

1.　この作品の外面の構成。その５編はそれぞれ秩序だった仕方で特有な研究対象を有している。論理的一貫性をもって相異となる国民や時代にかかわる資料が駆使されるが，この資料は長い準備作業や理論的知性にとむ年代に培われ研究されてきたものである。

2.　社会経済構成。これを通して，社会諸力と経済力の相互に関係するメカニズムを明らかにしょうとする。この構成はかれの創作における最初の論理的命題であり，経済学を国家活動や立法に必要な科学とせず（そのかぎりで目的は国民や国家を富ますことである。），スミスは見えざる手によって，資本主義社会が生存手段を自分で嫁せぎ，国民には生活基金を，国家には社会的欲求の基金をそれぞれ与え可能性を保障すると考える。

3.　（W.N.）の全資料を整序するレベルとしては，経済学に固有な限度内で社会力と経済力の作用メカニズムを議論するのに必要な経済範疇の構成である。

スミス理論の特性というか，かれの科学的研究のもつ内的論理の独自性を決定づける特徴的性格をば次のように区分して考えてもよいだろう。

1.　産業革命前夜のマニュー期を集約する構成。経済学の対象が形成され固まりはじめるときにあたって，スミス理論は内容上当時もっとも成功した資本主義論の一つをなす。とはいっても，完全でもなければ完結もしていない。

2.　スミス理論は社会経済的性格を具有しているので，それに含まれる経済学の重要な構造的範疇は理論システムの論理的な文脈のなかでのみ正しく理解されそして確定される。

3.　スミス理論は重商主義を，部分的には主農主義をも批判反論する。

4.　スミスに特徴的だったのは，資本主義の社会経済的矛盾がまだ成熟せず，労資間に，とりかえしのつかぬ最終的対決がなお未展開の時代に，(W.N.) をつくりだしたことである。

こうした点で，スミスはブルジョア経済学者ではあったが，不撓の研究家でもあった。この偉いスコットランド人の労作が保有した研究対象とは，商品生産のメカニズムとか原初条件の問題，経済人という名称をもつ生産者の性格づけである。ブルジョア経済を解明して，作用メカニズムの力をことごとく，一つの作動集合体(アグレガット)に還元して，スミスは例の二つの力が相互に作用するシェマーを確定したし，ニュートンの帰依者として物理数学的な志向をももっていて，変数と常数をえり分けさがしつつ，この変数値の変動に富が依存することをも確定したのである。

ブルジョア社会に関するかれのモデルは次のようにまとめられる。

第1に，相互に孤立した独立の零細生産者から社会はなりたつ。第2に，生産者のこの集合体は，一定の，人間の自然的・社会的本性から生じる社会経済的属性をもち，人は性総明にして，自分の健康や生活水準を何ら犠牲にせずに，不断に福祉を増大する。生来，人間は弱いのであって，わずかな分量の血ではそのエネルギー潜在力を制限し，内的諸力をきびしく節約すべく強いられる。〝理性の法典〟にしたがえば，生産要因や力の節約なり，福祉の増加なりに，かれの志向する個人的関心がある。だが，一人ぼっちでこれをするわけにはゆかない。第3に，そこで人は社会的に接触してゆかねばならぬ。人びとはある一定の生産機能に特化する。特化がこみいっているために，人と社会は諸力と可能性を多面的に増やすが，生産要因の力は，社会的本性によって決定されている。第4に，生産者個人の利益は，内容上も，集的度や方向の点でも，一致しないで，むしろ相互に対立する。各人は他を犠牲にして，自分の福祉を実現しようとする。人びと相互の関係が個人の利害と社会の利益を形成する。対立する相異となる利害を平等化するのは後者であり，個人の利益が実現される基礎となる。相異とった利害の基礎に経済関係は形成される。自然は人びとの社会生活に有用であって，同じく社会も生活が求める属性をうべく，人びとを方向づける。各人が相互に役だち合う相互利益がこれをはたす。このためには，各人は，他人の利益つまり社会の利益のために実現しなければ，自分の利益

も実現できない。第５，利害の相互関係は競争因となり，福祉増加を求めて，生産者は聡明な個人になる。第６，人間・社会のエネルギー潜在力は同一不変である。たえず増加する可変値とは（労働者の個人技巧とか創作をふやすとか，それを新しく応用するとかで）労働生産性である。第７，生産性向上を組織する普遍的形態とは，スミスによると，分業である。第８，同一品目をつくるための，作業の分化のみならず，異品目のための特化という条件のもとにあっては，かれら相互間に，当然のことながら，交換が発生する。第９に，社会的分業，マニュー分業に服して，人びとは自然的自白のシステムを活用する。スミスにとって，リバイアサンだった，重商主義時代の国家と，その専制的な生産規制にたいするアンチデーゼともいうべきものが，この自然的自由である。その自由と競争は労働の成否に応じて，人びとを各々の活動領域に配分する。第10，交換については，需要がこれを規制し，その用具が貨幣である。この貨幣をスミスは偉大な流通の車輪だという。第11，交換価値はその其礎づけとし，投入労働量なり支出労働の量的相互関係によって決定されるが，この貨幣表現が価格にほかならぬ。価格は需要による比率変化の，労働量の絶対水準が運動する，指標である。第12，商品量，欲求，支出――これらすべては，不断に変化し，均衡や調和は破壊をうけるけれども，需給・競争・価格のメカニズムは再生し，再び各部門の間に必要な分量だけを生産させるべく，見えざる手にゆだねて，対立する諸力や存在する起伏をつらぬきとおし，平均化をば実証していくのである。

スミスの構成はかなり簡単ではあるが，なお同時代人よりぬきんでていた点は，かれが社会を，人間の血液循環にたとえるよりは，価値法則の作用に服すると考えたり，経済学を革命化するというよりは，生産・分配メカニズムを開発してこれをふかく再改造していくなどの点にあった。また，スミスは分業を二分して，社会内分業とマニュー分業としたが，力点は後者においた。けだし，それは生産の増加する直接の基礎だからだ。これにたいして，前者はスミスにとって，富の物的内容の前提，多面化の基礎たるにすぎない。

ブルジョア生産の経済的規制因を明らかにしつつ，スミスは資本主義の矛盾ともども，解決を迫られる理論問題に直面する。資本主義をスミスなりに理論にうつしとった（W. N.）は，そのために矛盾の論理システムとなり，その矛盾を作者は自覚して（構造的範疇システムのなかで）構造分析の対象たらしめ，何とか解きあかそうと積極的に努力していた。しかし，この矛盾はスミスには，そうなまやさしいしろものではなかった。経済の両極限を叙述すべく，こうした方向でのスミスの議

論はきわめて矛盾にみちており，もっとも重要な範疇を研究するさいにも，積極的発言にはつねに逆のマイナス要素が随伴している。たとえば，賃金は労働の全所産でありその一部分でもある；利潤は他人の搾取控除であり企業者の費用部分でもある；地代は同じく控除であるが，土地利用とひきかえられる地主への〝自然報酬〟，また資本は他人労働の消費部分にして，資本家が初期に蒐集した資財(ストック)である，……など。

形式論理を知っているはずの教授として，大学で教鞭をとる人として，これはとんでもない撞着ではないのか。しかし驚くにはあたらない。問題の核心は，概念のアンチノミーが経済的現実の矛盾を理論として表示する結果としてあらわれるのだという点にある。スミス価値論は矛盾していて，一方では，価値の実体を社会的に必要な労働とはするけれども，他面，同じ価値を三階級所得の複合産物とみる。この矛盾に気づいてはいたが，解決し克服するのはスミスにできない。そのためには，価値のモディフィケーションとしての生産価格の概念をつくりあげる必要があった。けれども，価値法則にもとづいてこの範疇の定式化を目ざすものの，スミスはこれを十分満足のいく解決を示さないままに終ってしまった。

スミスが示した解決の脈絡は次の通りである。

対立する階級の間に，国富の生産と分配がいきわたる仕方を考察したスミスは，交換を規制する原則を発見しょうとする。そして，この起点を，直観力のゆたかなかれは資本制形態を捨象して，単純な売買関係にすえる。この問題提起のために，かれは資本主義を二分して，質的に相異となった状態つまり原始形態と文明形態とせざるをえなかった。前者は資本の蓄積にさきだつ単純商品経済，後者は前者の発展した形態。この区別によってスミスは事実上，W—G—Wの商品関係とG—W—G′のそれを識別しえた。単純な交換関係に注目して，科学的アプローチのもくろみのもとに，具体から抽象へ，つまり分業・貨幣→価値表現の交換価値→現物比の交換価値へと上向〔？！〕し，自然的交換価値から内的交換価値へ，更に商品とその属性へと，また，商品から現実労働性格の折出と移っていったのである。

また，経済現象の形態を研究したスミスはかくれた本質を明かし，何らかの本質恒常的なものを確定すべく努力した。その本質は経済過程において変化とモディフィケーションを制約するものではあった。かれは，交換価値のなかでの不一致，背難，矛盾などの原因と源流を発見すべく，研究途上で最初の科学的抽象を定式化した。これによって商品分析がスミスに可能になり，更に，商品が富の原基形態たること，この性質・原因を解明するためには，商品属性を知る必要のあることなど

がこもごも明かになった。

先人につづいて，かれも商品の二性質，使用価値と交換価値を指摘し，使用価値は合目的的生産活動の結果であるが，内的価値はこれに反して，同質の投下労働量に還元できるとした。商品分析にさいして，この起点を設定したスミスを高く評価して，マルクスが二重形態をもってする労働への還元は一世紀半以上の古典経済学による研究の批判的集約だったと論定したのは周知のところであろう。

単純商品経済は原始社会の基礎であり，この関係に同等な生産者がはいる。生産者は各自生産財の所有者ではあるけれども，ロビンソンばりの孤立せる個人ではなく，社会的分業を通じてつねに他人と結びつき，社会的欲求や自分の欲求をみたすために，市場に働きかけたのである。スミスにとって，生産関係とは，相互に対立しながら，相互のために働く経済的利害と同義であり，(W. N.) でうつしだされる生産要因内の関係は商品交換を通してのみ現象する。市場で交換される効用としての生産物は相互に比較できぬ。交換のためには，内的—外的等価物すなわち必要な労働支出と貫流の車輪が前提になる。貨幣はスミスにとって長期にわたる発展の所産にして，それ自体で内的—外的な価値を有する独特な商品。スミスは貨幣のいくつかの機能つまり価値尺度，支払用具，蓄蔵手段，世界貨幣をみるが，その貨幣は，市場の交換価値運動を規制し，需給に一致した支出に関連する。

ちょっとみると，スミスには商品・価値・貨幣の展開された理論があるようだが，かならずしもそうではない。しかし，スミス自身まったく正当にも，交換の基礎を支出労働に還元する。この還元は単純であるが複雑なことが特質。スミスは複雑なものとみた。1.支出労働の相対的価値表現は絶対的表現では一致しない。2.作業がことなり労働がちがえば，絶対的価値も同一でない。けだし，複雑度や支出労働に相異がないためだ。二つは還元の二性格に照応する。スミスによると，価値は労働で評価できぬ。異種労働相互間の比を決定するのはときとしてむずかしい。異種の作業への支出時間はかならずしも，労働量間の相互比できまるわけではない。努力や支援の度合いが考慮されねばなるまい。ある重い作業の１時間は軽作業の２時間より多くの労働量を含む。習得に10年かかる仕事にしたがう１時間は，習得を必要としない１カ月の仕事よりも，多くの労働を含むのである。

スミスは，真実価格と名目価格，つまり労働価格と貨幣価格を区分，そして交換価値が直接じかに労働支出に還元できないこと，けだし商品は商品と交換されるけれども，労働とではないからだとしている。スミスのいうところによると，人びとはたいてい，一定量の商品が何を意味するかを，一定量の労働が意味するよりも，

いっそうよく理解するのが通常である。前者は感知しうる対象世界であるのにたいして，後者は抽象の世界であって，証明はできるにせよ，そうはっきりしているわけではない。売手や買手は，自分の利益になるように，自己労働による所産の価値ともども，剰余生産物を実現する。

原始時代は，各自に生産財を所有する同等な人びとが相異となる諸財を入手するので，必要な労働支出が商品交換を規制する唯一の基礎であった。しかし，発展した状態のもとでは，ことがらはちがい，特定の人のもとに蓄積された生産財は人びとを雇用し，かれらに生活費を供与するけれども，これは生産物を売却して利益をうるためである。商品を貨幣なり労働または他商品と交換するために，原材料と賃金価格の外に，資本をリスクに投じる企業者の利潤を確保すべく何がしかの額がなくてはならない。こうして，労働者が材料に付加した価値は二つの部分すなわち賃金と利潤に分解する。後者は企業主が材料を賃金の形態で投入した資本額にたいするその分前である。スミスはたしかに，商品経済に二つの状態を区別するものの，いかにして何ゆえにそれが生じるのかを不問に付すが，そのアプローチがまったくないかといえば，そうではない。たとえば，スミスによると，分業とともに，人びとの能力とか労働の生産力とか，またこの所産などにおける差異も増大する。が，移行の宿命的不可逆性は強調するが，スミスはこの過程の破壊的性格を解明していない。

以上のことから結論できる点は——次のようである。すなわち，スミスは財産の規模や階級の差異があり，これが発展した社会にみちびいていく史実はみとめるものの，この問題を正面切ってとりあげていない。かれにあっては，資本をためこんだ人がこれを自分の利益のために利用するのは当然なのである。なぜ当然なのか。それは現実の史実だからだ。そもそも資本はいずこより来たのか。勤勉な人が昔々，資財をつくり資本をつくったからだ。

だがしかし，ここでこそ現象の本質を解明し，定式化ずみの資本主義経済関係の総体を，交換価値やその生産関係を通じて展開していくことであった。もちろん，スミスには成功しなかったとはいえ，この過程を解明するには，具体から抽象へと最初の抽象をやった後に，逆に抽象から具体へと後方に旅すこと，すなわちその発生過程を通して資本主義システムの範疇的統合をおこなうことがぜひとも必要である。スミスにこれはのぞむべくもない。二つの状態を研究することにおいて，スミスに弱い環となっているのは方法論である。歴史方法的に商品経済や資本主義の起点に向うが，それを展開せず，経済学全体におけるその位置が理解されていない。

したがって，マルクスのいうように，交換価値なり貨幣の単純な規定のなかに，かくれた形態において賃金と資本の敵対性格が含まれているということには想到しないから，交換価値はせいぜいのところ，外的な価値の形態にすぎない。商品分析において，内的属性にほりさげたり，交換価値を独自の経済関係に孤立化して研究しないで，かれは，本質上，商品を形成する労働を，この事実から生じる矛盾を特徴づける第１次アプローチのみにかぎっている。

たしかに，発展した状態にあってその事象を論証したり基礎づけたりはしなかったとはいえ，内容的に，この社会の基本関係として，労資関係を正当にも，確定している点はスミスの功績である。スミスは価値の生産価格への転化や労資両階級の発生を示せなかったものの，富が労働によってつくられることや，独立労働者による剰余生産物の個人的領有が資本家による利潤形態の領有に転化して，地代・利潤，その他の資本収入となるその不労性を労資の摂取関係でとらえたりする——この点では正しい。ところが，剰余価値論における主要問題は，新価値よりの控除にあるのではなく，資本家の控除が可能となるような経済的基礎を解明することにある。問題の解決には，前提として，マルクスもいうように，労働と労働力の区別，必要労働（生産物）と剰余労働の区別が，はたまた一切の範疇，それゆえに労働の二重性理解が必要なのである。スミスはこれをもち合わせなかった。そうはいっても，ブルジョア社会の富を研究していった過程でかれはこの問題を推進し，解決困難が起点を分析する方法論の欠陥によって生じることを明確にしている。この矛盾は新しい地平における理論と方法を創出する必然性を快定づける。スミスの方法上の欠点は，再生産論や生産的労働論を含めて，すべての理論局面にうつしだされている。

スミスは，労資の対立，賃金と利潤の反目をよく理解し，この間に闘争があることを熟知していた。そして，この闘争が資本主義経済メカニズムのなかにおける主力の一つだとした。富をつくるのが労働者だとみなしていたかぎりで，企業者の階級利害の反映と合わせて，スミスは資本や富の増加に資する物的生産とか，生産領域における階級間の相互関係を理論的に把握していた。労資間の反目という見解は後に，同権の二つのアンチノミーとか，階級間闘争というマルクスの考え方に発展結晶していくのだが，この闘争過程で労働者は物的精神的富にたいする自分たちの要求をつきつけていくことになる。

経済学を独立の科学とすることをはたし，資本制発展の一時点としてマニュー期を叙述するのが(W.N.)であるが，スミスはブルジョア古典経済学の範囲内で全一連の範疇を与え，科学的抽象の方法を開発し，社会経済的に機能する諸力のメカニズ

ム問題を提起した。生産関係の総体をスミスは価値の発展した形態でしめくくり説明しようとしたり，価値の一般的基礎として社会的労働を折出したりする。このあたりでスミスは完全に，価値をつくる労働の二重性を含めて，あらゆる範疇に内在する二重性を解明する必要性にぴったりと接近してくる。しかし，問題の科学的解決には，なおいま一歩である。

不十分さをひきづりつつ，剰余価値の原因を明かし，それを普遍形態でまずつかみもする。この場合，利潤・地代はその分岐形態でしかない。利潤は発生本質と外形で賃金と相異となり，相互に反目する。この反目をスミスはみていた。

矛盾と混乱の代償をはらって，価値の生産価格への，単純商品経済の資本主義への転化の問題を，また解決の必要性ともどもその手段としての材料を，とらわれることなし，大胆に提起したのはスミスの大きな功績である。労働・価値・資本・富に関して，自分なりにとらえた概念をもって，スミスは経済学史上はじめて，労働疎外のメカニズムを具体的分析にもとづいて解明した。時代の進展につれてこれはふかめられやがては，マルクスによる完結を用意するのである。利潤論や生産的労働論についても，後世が解決を与えるべき矛盾としてスミスはこれを残した。

（W. N.）は，世界観，理論，方法にわたって，ブルジョア的限界という刻印がある。これが理論システムの大きな欠陥を生みおとす。発生論的に資本主義にアプローチするこころみがあるにもかかわらず，かれは眼前にある既存の生活形態をとりあげるために，資本主義への転化の解明を，結果として消去してしまい，構造上の転置の課題がなくなる。これにたいしいては，スミスの注意を本質理解ではなくて，形態の叙述に向かわせて，直接に利潤と剰余価値を，資本と生産財を混同していった。もう一つの欠陥には，抽象から具体に，何がいかに運動するかを示すことがない。経済メカニズムの観点から，資本家の剰余価値への権利を論証しなかった。再生産論の展開をとざす $v+m$ ドグマや統計資料の不備もスミスの欠点。

現代のブルジョア経済学とスミス関係をみると，どうであろうか。

スミス理論には多くのものが陳腐になり，科学的意味を失って史的関心のみが残るものがすくなくはない。また多くのものが科学の要素源として最初の理論システムのなかにはいり，内容をゆたかにしている。なぜかといえば，経済理論の発展はそのつど，1.経済的現実の示す新事実の分析，2.経済学史が蓄積したその資料の批判的思案と利用という——二つの平行する相互関係によって進行するからだ。新しい諸作品では（W. N.）自体はなくなり解消する。これにもまして，注目に値するのは，スコットランド人のこの遺産をめぐって，ブルジョア経済学とプロ

レタリア経済学がしのぎを削って苛烈な闘争を反復する過程にすでに２百年の歳月をかぞえたことである。これはけだし，当然のことであって，スミスは経済学の学派とシステムの分水嶺に立っていたからだ。ブルジョア経済学の方向で，スミスは，あるいはH.スペンサー，あるいはボェームにより，いっそう仕上げられ展開を図られたが，サミュエルソンは，スミスを，ケインズ派理論や主観心理学派の考え方と結びつけて，新古典派的綜合を企だてた。こうした方向はスミスを独占の利害を表現しようとする人とみなすことになりかねぬ。けれども，(W.N.) は，経済学史の文化科学層としては，その固有な科学的成果にてらして，第１の遺産分与権をマルクス主義に与えるのは確実であろう。けだし，その成果が西欧とロシアの社会主義的サンプルを展開してきたからだ。真に科学的なスミス見解はマルクス経済学を育てた。

3　マルクス主義を通して直接また間接に，スミスが社会思想に大きな影響を与えてきたゆえんはここ２百年の歴史が如実に物語っている。レーニンのいうように，マルクス主義はイギリス古典経済学，フランス社会主義，ドイツ哲学——三源泉中の最良のものを継承摂取したうえに成立している。が，古典経済学で最良の部分とはリカードともどもスミスたることはことわるまでもない。

しかし，スミスに特有な独自性は，18世紀の前資本主義を多少ともうつしだして，いるだけに，当時のブルジョアジーがはたした社会的役割の２重性がつきまとい，科学／非科学の混在をもって特徴づけられる明白な矛盾があることであろう。この独自性は，1.かれの学説全体における問題に特有であり，2.外観と内容の矛盾として，かれの研究方法を反映する。たしかに，かれはこの矛盾を説明できぬじまいだったとはいえ，これを固定化し自明のものにしたかぎりでは，後に，社会科学の発展に大きく貢献したものである。これはマルクスの指摘したことである。同じ古典経済学といっても，リカードになると，スミスを完結するだけあって，かれよりもいっそう形面上学的な方法をもって，この大切な矛盾をみとめず，理論問題をあいまいにし，とくに資本主義への移行とともにはじまる，価値の反対物への転化をばみぬくことはなかった。

スミス理論の矛盾を解決したことで，マルクスはいわゆるマルクス主義の経済理論を成立させたが，同時に自分の結論を立証してみせる機会にもなった。

スミスは先人たちにくらべて，商品生産の合法則性を前進させたが，ほかの分野と同じく，ここでもみのり多い点は，解決でなく，矛盾の提起である。これが前進

の内容。周知のように，商品に投入された社会的労働量と，商品がそれとひきかえられる生きた労働量を混同し，労働による価値決定では労働という機能と労働力商品をごっちゃにし，二つのまったく無関係で相異となった価値規定をスミスは与え，しかも両者の間をゆれ動くのである。科学からすると，前者のほうは正しく，搾取論を含めて，資本制経済の分析でイギリス経済学者が伝統的に述べた議論である。もう一つは非科学的考え方。

この矛盾は資本の現実にとらわれたスミス理論の未発展をうつしだすのであるけれども，未解決のままのなかにいくつかの重要問題を提供する。

第1に，スミス価値論の矛盾は使用価値と交換価値の区分問題と同時に，内的価値尺度（支出労働）とその外的尺度（他商品の使用価値，更には貨幣での価値表現）の区別の問題にかかわっている。

実際，1商品 w_1 をもう一つの商品 w_2 で評定し，これが w_1 への支出労働量による価値決定と同一だと考え，更に，スミスは w_1 と，w_2 の使用価値としての外的現象形態を，つまり価値と交換価値を混同する。この混同は実際の現象やその相互関係の問題を提示するものであるが，これをスミスは解決できなかっただけである。価値を商品生産者の特殊な社会関係として，それに内在する商品の相互関係がとる現象形態を交換価値として，また更に，価値形態の史的発展過程として，真に科学的にフォローすること——これはマルクスにおいてはじめてなしとげられた。

第2に，スミスの矛盾は労働者の労働という範疇と労働力という範疇を区別すべき問題をうちだした。この区別は資本主義の科学的な理解にとって原則的な重大さを有する。これを，階級的史的限界からして，古典経済学は区別できなかった。

スミスは，単純商品社会と資本主義を事実上意味する二つの段階，つまり価値法則の発展する2段階を歴史的に区別した。第1の段階では，購買労働による価値規定は本質的に正しくはない（販売した商品価値の等値形態としてのみ，購買労働はあらわれるが，価値は決定しない）が，二つの価値規定間の量的誤差はない，なぜならば，商品に体化した一生産者の労働はもう一つの商品が示す他生産者の同量労働と交換されるからだ。

第2の段階が資本主義。そこでは生産者は生産財と切断されて賃労者になる。このために，かつてのように全価値をわがものにすることはできず，〝労働量〟という支出労働は労働力の価値たる〝労働の価値〟とはすでに同一の大いさであることをやめて，前者は後者よりもつねに大きいものになる。全過程に目をひろげて問題をほりさげてみると，資本主義では対象化された労働量（この場合は不変資本に対象

化されたという意）が多くの生きた労働を支配する。対象化の生産をめぐる前提と終末を混同するスミスとしては，資本主義に移行するとともに，労働時間はすでに商品価値の規制因たるとやめ，価値法則も作用しなくなるという結論になる。スミスは価値法則論を拒否して，価値を所得の合計をもってかえようとする。けだし，じかに労働価値説の立場からは，資本制利潤の現象はとうてい説明できないからだ。

ブルジョア経済学の矛盾にみちた価値論定式化に関して，マルクスは，一つの立場からもう一つの立場に転じたり両者の間をひっきりなしに動揺したりする矛盾が，スミスでは，労働と労働力の混同を是正すべく，これを知覚せしめるようないっそうふかい根基を有しているのだ，と強調して，次のようにいうのである。リカードはこのスミス矛盾をいっそう開陳するものの，ふかい根基をみとめず，この矛盾に正しい評価を与えていない。けだし，それを正しく解決していないからだと。スミス価値論の矛盾を，マルクスは科学が発展する刺激材料だと考えた。先人がみとめてきた商品と商品の交換と，商品と資本の交換の間にあるはっきりした矛盾はスミスを混乱させたが，リカードもこれを解決できなかったのは，経済過程への形面上学的アプローチに加えて，ブルジョア的限界からくるかれの抽象力不足のせいである。この矛盾は，労働力にではなくて直接労働に資本が対立させられるかぎり，解決できぬままになる。マルクスはこう評定した。

リカードとは逆に，マルクスにしてはじめてこの矛盾根基が解決できたのは，機能としての労働と，商品としての労働力を区別したからだ。機能は，労働力商品のなかに考えられる二側面の一つ，つまりその使用価値である。この独自の商品から，マルクスは剰余価値法則が価値法則の破壊ではなしに，これを前提に作用することを示した。労資間の取引対象となるのは労働でなく労働力であるから，価値どおりの労働力売却が創出価値の資本家による無償の一部領有の前提になり，剰余価値は無償領有の価値であることを，マルクスは，あざやかに示した。価値どおりにことがらがはこぶと，労資関係は最終成果の姿，すなわち資本家は賃金の形態で与えた価値以上のものを入手する姿ではっきりする。このくいちがいは，労働と資本の関係を分析する場合だけでなくて，通常の交換を検討する場合にも，したがって剰余価値法則別研究の場合のみならず，価値法則の研究にあたっても，スミスに混乱をもたらし，撞着におとしいれることになった。スミス価値論の矛盾は未解決のままで，資本制経済研究の起点となすには，あまりにも，外部からの攻撃されやすい位置にあったが，マルクスの解決で，この攻撃は基本的に封じられたわけである。この点から，マルクスの，価値論，経済学への寄与は，はかり知れないほど大きい。

第3，単純商品経済にプロパーな法則が資本制法則に転化していく史的過程を理論的に解決できなかったスミスの問題をば，マルクスが解決する。単純生産では生産者は生産財の所有者であるから，自己労働の所産をすべて領有する。が，生産財所有者の富が労働力と交換にうけとる他人の生きた労働量により決定されるというのが資本制生産の特質である。ところが，労働力が商品となる場合に，表象にとらわれていると生じるはずのこの矛盾がいかに生まれてくるかを，スミスは理解しなかったのだとマルクスはいう。こうして，価値の二重論議は，単純商品生産と資本制生産を峻別する必要性を，したがって，不幸にしてスミスがその史的相異を理解しそこなった論点を含むわけである。

第4に，投下労働の価値規定と購買労働の価値規定との混同は，スミスの場合，かれが価値と生産価格を混同したことより生ずる。しかしこの混同はかえって，その是正の必要つまり区別の問題点を提起することになった。実際，原始社会から現代の社会へ移るとともに，投下労働による価値規定はなくなり，これにかわって，所得の合計（地代・利潤・賃金）が規制因となり，交換価値の第1源泉として所得が出現するのだと——スミスはこう考える。移行とともに，いわゆる転形問題が登場してくるが，スミスは生産価格という転形基本型を理解できない。投下労働を基礎にすえるかれの理論は原始状態だけを規制する。移行とともに，これにかわって，逆に，所得自体が価値を決定する。ところが，またも反転しやはり所得自体が商品価値によって決定されるとかれはみる。前者ではかれは価値を論じないで生産価格を述べ，利潤の大いさは価値の大いさに何ら影響せず，したがって，所得の大いさも価値のさまざまな現象形態にすぎないという。利潤や所得の平均値が変動すると，生産価格にも一定の影響を及ぼすことはある。しかし，技葉的だと。ここでは価値法則の生産価格への転化が問題となるかぎりで，例のように，スミス理論は問題の所在を教えてくれる意味でみのりは多い。この問題をもマルクスは解決した。それは剰余価値の具体的諸形態の法則（平均利潤法則，利潤率低下法則，差額地代と絶対地代の形成・運動の法則）含めて資本制経済に内在する背離のメカニズムを確定したことにある。価値構造に関して，スミスの立場を批判的にフォローしつつ，マルクスはこの問題をうけとめたブルジョア研究者が動揺していることや，価値の所得への還元を指摘する。還元の説論について，マルクスはこういった。すなわち，リカードにたいして，スミスがすぐれているのは，後者がいだいた疑念を正しく解決できたという点にもとりあるのではなく，逆にがいして疑念の表明そのものにあるのだと。

賃金に対象化された労働とひきかえに，生きた労働を多くうけとる労資交換の不等価性格をスミスがみとめたとして，資本関係とともに，生きた労働の追加払いがあらわれることを強調する点でスミスはリカードよりもすぐれているのだとマルクスは注解する。不等価への転化は資本の蓄積と土地私有の発生であり，直接生産者と生産財の切断である。価値法則は消失し，これとぶつ切れた形態で剰余価値の発生や労資の交換を，スミスは説明すべき問題として提起する。もとより，この論点を解決できなかったこと，ほかの古典経済学と同じだが，かれに特徴的な点はといえば，移行が商品関係におよぼす影響がいかなるものであるかを提起する仕方で，移行にともなう撞着矛盾の発生をとらえていることであろう。マルクスは，スミスのように移行を介して法則の作用中止というふうにみるのではなく，もっぱら価値法則にもとづいて，一見これに矛盾する剰余価値法則をば説いているのである。

スミス剰余価値論の矛盾は売買対象が何かの問題を検討するさいにも生じる。すなわち，一面では，この対象をかれは労働だとして，古典経済学をぬきでがたい袋小路においこみ，価値法則にもとづき労資関係を説明する可能性を排除してしまったが，他面，労働力の再生産・維持に必要な労働支出と遂行される労働とがまったくちがうのだという点はよくわきまえていた。異質の対象がこのように売却の項目になっているのだ。内在法則のメカニズムと外的に偽瞞の形態が一体どう関連するかの問題を，誰にでも分かるように明かにしたのもマルクスである。たしかに，外観は労働を売っているように思われるのだけれども，内的（本質的）には，労働力を売るのだ。一方は搾取をおおいかくすが，他方は，その論理をつきつめたはてに，搾取が結論できる前提として位置づけられる。

剰余価値を，スミスは資本制経済の実際過程でそれがこもごもとる具体的な形態から独立に，それ自体として把握しえなかった。が，この分野でもかれの矛盾は後世にとって，貴重な他山の石となった。一方では，産業利潤・地代・利子が剰余価値の特殊な形態であるとせず，またこうした剰余項目ともども，賃金も相異となった意義を有する生産因の所得であるかのように考える。これは確実にあやまりである。しかし他方，剰余価値とその分岐形態との相互関係への科学的アプローチには近づいている。利潤・地代を労働生産物の控除部分とスミスがみなしていることは周知のことだ。スミスは逆にまた，剰余価値を普遍的範疇とするものの，利潤・地代がこの分岐としてあらわれる関係では，特殊な概念としてこれを折出していない。資本所得と賃金を，資本や土地所有の不労所得と労働の所得として的確に確定してはいない。スミスのこの面に着目して，マルクスは剰余価値を，賃金を補塡する労

働以上に労働者が追加支出する労働の部分としてとらえた。

資本主義のもとで労働者の立場を研究していくさいにも，スミスの撞着は顔をだす。すなわち，一面，搾取をみとめる立場から，生産性があがっても，それは労働者には有利でないと判定する。土地の所有とともに，かつて原始状態にあったような——生産物全部を労働者が入手することはすでに可能でない。変化した条件のもとでは，生産性が高まっても，地主なり資本家がこの成果を分け合うだけで，労働者には主として無縁であり，自分の固有な分前としては賃金だけであり，それもみずからと家族を維持扶養する最小限にかぎられて，これを強制される。こう考えて，スミスは労働者の状態は貧困化ぶくみにあると結論する。しかし他面，全資本と可変資本を価値上ごっちゃにして，不変部分やその比重増加を蓄積増加とはみとめず，可変資本の蓄積だけをそうみなす。スミスによると，蓄積に並行して，労働力への需要増加→賃金増大→労働者状態の改善の過程をたどる。しかし，この考え方は前者に矛盾し，資本の多数データとも両立しない。

労働者の状態に資本制生産が与える影響はといえば，階級対立が尖鋭化することであり，そのメカニズムが問題になると，スミスはここでもまた，二つの相いれない視点をうちだす。一つは後にマルクスがその解決に重要な意義を付したところの，労働者階級の史的役割という問題を，心ならずもスミスは提起した。スミスを継承して，マルクスははじめて，ブルジョア社会の廃止をめざす労働者階級に決定的役割が属するものと考え，これを立証してみせた。しかしいま一つ，スミスにはそうでない別の考え方もあった。

科学的展開のバネ要因となるスミス見解に内在的な矛盾は資本概念や剰余価値の具体的形態のなかにも伏在する。スミスは抽象的労働と具体的労働をなるほど，区別しはしないが，経済現象を解明するにさいして，あるいは抽象的労働とその成果から，あるいは具体的労働とその成果から，それぞれ一面的に発足して，同一の問題を相互に矛盾する見解をもってとらえている。剰余価値を検討するスミスの科学的立場は，その分析を完結させるものではないけれども，資本制経済の内的関連の解明をうつしだしているのはたしかである。この完結は抽象的労働のほうからのみはたされるはず。スミスの非科学的な立場とは，多くの場合，資本制関係の外的な物象化現象とか，具体的労働なりその成果に直接に連結する過程とかにかかわって足をすくわれたものであり，その彩たる例示が資本理論の二面性であろう。

第1の場合。資本とは利潤をもたらす資財（ストック）である。資財の蓄積は生産者（賃労働者）が生産の所産を資本所有主と分かち合うことを決定し，それゆえに所有者の利

潤は労働所産からの控除である。したがって，資本はこの控除を強制する。明らかに，ここでは資本は他人の不払労働を強いる要因であり，方法論的に価値・剰余価値の生産過程，つまるところ抽象的労働の機能過程の分析にねざす。〔ここでは資本は資財！〕

第２の場合には，資本を生産に用いられる財物や労働用具から成る資財（ストック）にみる。他人を搾取しない独立生産者も資本を保有することになる。けだし，ここでは資本は使用価値をつくる単純な労働過程の物的要因であり，具体的労働の視点から生産が特徴づけられているからだ。〔ここで資本は資財！〕

しかし，この立場の矛盾は資本の物的形態から社会経済的本質を，労働過程から価値増殖過程を区別させる問題をば提起し，この解決を方向づけることになった。

利潤源についても，スミスらしい矛盾がある。スミスをひきさいて２分撞着にいたらしめるのは，剰余価値法則と平均利潤法則の相互関係，労働過程と価値増殖過程における生産手段の相異となった役割，その他のを含む一連の複雑な重要問題である。この矛盾はまたもや解決されるべかりし問題論点を鮮明にする。

一面，利潤を，スミスは賃金をこえて労働者が付加し資本家が無償で領有する価値部分だとみる。したがって，利潤を，1.賃労働を搾取した結果として，2.価値増殖過程の所産として位置づけるのだから，それ自体，生産財で表示される資本とは何のかかわりもないこと，生産財はといえば，対象化された価値は新生産物に移り，その価値部分となるのだというふうに，スミスは考えた。これは，かれが労働の二重性を明確に理解していた結果というよりは，むしろ直観的に抽象的労働とその結果に立却した視点から，利潤発生を考えていたせいだということだろう。

他面，同じ利潤を，かれは可変資本からではなく全資本から，したがってかれが資本とみなした機能生産財からひきだす。この場合，労働の成果にして，等価をこえた部分にすぎない利潤が何ゆえに投下資本額に応じて，その大いさをかえるのかにはかれは何も答えない。スミスにあってあまりにも大きな役割をなしているこの第２の立場は単純な労働過程の外的現象を叙述したにすぎない。生産財は使用価値の生産要因として働くけれども，商品の価値生産因ではない。具体的労働に立却したこの立場からは，剰余価値の利潤への転化，利潤の平均利潤への転化といった過程現象は理解できないし，説明も不可能。それゆえに，剰余価値法則と平均利潤法則との間の矛盾もかれのもとでは固定化する。しかし，この矛盾は，使用価値や商品の生産における生産財の現実的役割を解明し，価値と生産価格，剰余価値と平均利潤などの一連の相互関係を解決すべく，さけがたく労働価値説と剰余価値論をふ

かく基礎づけるように方向づけるわけである。

同一の地代論でも，スミスではまったく異となる議論があり，抽象的労働と具体的労働をごっちゃにするために生じるくいちがいである。前者では，地代とは土地所有者が無償に領有する価値の一部分であり，その始点は価値増殖過程つまり抽象的労働。　そうでなく，源泉を自然や肥沃度に求めるところの地代論が後者である。土地は，農業労働過程の表面にあり，生産財なり使用価値の一つで，具体的労働から生まれる。

資本や剰余価値に関するスミスの矛盾せる議論は，経済学における部分領域の理論問題だけではなく，資本主義分析の方法論という一般問題をも提起することになった。

スミスの理論には多くの場合，科学的に正しいものと誤ったものが混在している。そればかりではない。同一の問題が相異った立場からとはえられるために，まったくちがう規定をうけて，矛盾におちいる。その立場とは外的現象形態と内在的本質，マルクスの表現では，エクソテリッシュなものとエソテリッシュなものの二つ。二つの立場は研究対象の構造性格と不可分。スミスを研究して分かることであるが，方法のかれに特有な二面性は，意識されていないとはいえ，商品生産者の二面性にねざす。具体的労働にかかわる外的形態の叙述は，この労働なり成果がじかに意識的に再生されるかぎりでは，実際，具体的労働のさまざまな現象をうつしだしてくるし，過程の内的関連を明らかにしょうとするこころみは逆に，抽象的労働の現点から経済現象を解明することにほかならぬ。スミスにおける方法の科学的欠点は，かれが二つの労働を区別せず，この相互関係をみないで，経済過程の分析における発端として外観と内容の関連を考えなかった点にある。しかも，相互に矛盾するひたむきな理論の所産はかれの全システムのなかに一貫している。

この論点で大切なのはマルクスによるスミスの科学的解明であろう。いうまでもなく，スミスは生産物の価値構造のとらえ方で矛盾していて，ある場合は，それを所得（賃金・地代・利潤）の合計として $v + m$ に還元するかと思えば，ある場合には，粗生産物／純生産物の概念でもって，第4の要素ともいうべき，生産用に支出した不変資本の価値部分 c を，資本の維持費として折出する。この二面性に関して，マルクスのいうのには，スミスは自己の理論をひっくりかえしているのだが，かれはそれに気がつかないだけである。その奇妙さの原流はかえって，スミスの科学的考え方に求められるのだと。スミスに矛盾が生じるのはかれが科学的分析の起点を有していたためだという一見，パラドキシカルな評定であるが，この発言は，

いかにマルクスが先人の理論をふかく研究し方法的基礎を解明しようとしているか，またこの過程でスミス矛盾の解消がいかに重要かということを明かすものであろう。

それでは一体，そのためにこそってスミスが混乱におちいったといわれる分析の科学的起点とは何であろうか。その回答は，スミス価値構造論をマルクスふうに分析することである。

1.(W. N.) の冒頭にあるように，各国民の年労働は毎年，消費する生活財を与える本源的基金である。この場合，年労働の所産はその間に生産された使用価値の全合計から成るのだ。したがって，ここでは使用価値の源泉である単純労働過程，あるいは具体的労働の視点からだけ，問題にアプローチする。このアプローチは，スミスでは何らしっかりした方法的基礎に立脚しているわけではないが，マルクスのいうように，生活財に有用な形を与えることだけに着目しているにすぎない。

2. 他面，年労働の所産はかれにとって，年間に生産された全価値である。労働者は賃金の等価をこえて資本家のために，余分に価値を追加するのであるから，その付加した価値は賃金・利潤・地代に分立する。ここで分析の起点は抽象的労働。

前者では年労働の所産は，使用価値の総体であるのに，後者では年間に生産された価値である。一方では年社会的生産物が問題になるとすれば，他方では国民所得が論じられる。この点，マルクスによると，スミスの方法的欠陥は，いずれも一面的にのみ考えるだけであり，資本制経済の現象を，あるいは具体的労働から，あるいは抽象労働からだけ論ずるにすぎず，使用価値の源泉としての労働と価値源泉としての労働を自覚的に明確に区別できないでいるために，両労働の機能結果をごっちゃにし，年社会的生産物価値とこの年価値を混同する——こういった点にある。この矛盾は資本制経済過程を研究するさいに労働の二重性を考える直観的な性格をうつすばかりではなしに，階級的史的限界でもある方法の欠点をも表示する。

区別なきところに，混同もなければ，関連もない。たしかに，スミスは一面的だったとはいえ，商品のなかに二面性を発見して，経済学に大きく寄与した。これはやがては，資本制経済の内的法則から外的現象全体を説明させるものであり，経済学の決定的転換を構成する要素にもなるわけだ。この作業をはたしたのが，二側面を峻別したがゆえに，関連づけもなしえたマルクスであるが，かれは，これを労働の二重性という方法的自覚にまで高め，古典経済学の一世紀半にわたる研究を総括し，いろいろな未解決の問題をば完結することになった。スミス理論の矛盾をブルジョア経済学における天才的要素とみなしたマルクスは，現実に根をもたぬ外観そのも

のと現実との間の矛盾としてとらえ，問題を鮮明にする。たとえば，価値法則は私有とともに，反対物に転化するというスミス見解は，価値法則と剰余価値法則との間の外観上の矛盾をうつしだす（というのは，剰余価値は価値法則の破棄のうえにではなく，むしろそれを基礎にしてのみ確立するから。）が，同時に価値法則と労資間交換の最終結果との間の現実的矛盾を固定する（両法則内の現実的矛盾をスミスは固定する）。というのは，この交換はつまるところ，不等価交換だからだ。

価値法則が反対物に転化するというのは外観上の矛盾であるが，労資間の最終結末が不等価だというのは現実の矛盾である。こうした矛盾の現存はそれを指摘したスミス理論に天才的性格を付与せずにはおかぬ。また，この矛盾は資本の現実過程における衝突をうつしだし，経済発展の重要な問題を含むのであり，まさにこの提示ゆえに，スミスにマルクス主義の先駆者としての役割を確定するものであった。一口にいって，古典経済学，更に，マルクス主義へのスミスの寄与は，問題の解決にあるのでなくて，そのリアルな提起にある。

4.　2百年前の1767年3月に〝諸国民の富〟は出刊をみた。が，スミスとその作品が18世紀および19世紀前半のロシア経済思想におよぼした影響力については，何どとなく論じられはしたけれども，研究上の議論はいまだ十分とはいえまい。とりわけ，社会思想に与えたスミス理論の先進的性格は具体性をきわめているとはいえない。19世紀後半に闘わされた，マルクス主義と自由主義的ナロードニキとの間の争点についても，かれの個々の理論は注目に値するし，ソビエト時代のスミス研究歴も関心をもてるテーマである。以下，それをすこし問題にしてみたい。

まず，スミスがロシアについて何を知り，これをどのように作品にうつしとっていったかの問題からはじめるのが適当であろう。というのは，たしかにスミスは，当時のロシアが未生育の資本主義段階にあったし，またロシアの経済情報は不十分で信頼のおけない状態であったにもかかわらず，それを研究して，ロシアに関する記述をしばしば与えているからだ。

3世紀にわたるロシアの経済発展に着眼し，スミスはスエーデンやオランダなみに，この国をとりあげ，奴隷労働の低い生産性を示すべく，その例証として，ロシアをひき合いにだしたり，7年戦争（1755～63年）におけるロシア兵士の勇敢さを引用したり，最後に，イギリス使節団が取引事業のためにはじめて同国を訪ずれたことをかいている。学史的関心をひくものとしては，スミスのグラスゴー在職の二人の弟子にして，後，モスクワ大学教授として活躍するデスニツキー（С. Е. Десниц-

кий)とトレチャコフ (И. А. Третяков) の問題である。とくに，ロシア経済思想へのスミスの影響を考えるさいには，この問題はさけてとおることではできない。二人は留学中に (M.S.〔1759〕) という作品を知ったはずで，1762～63年のスミスのおこなった道徳哲学の講義も聴いていたはずである。この講義録は19世紀末になってはじめて公刊されたけれども，スミスの経済的見解がたどる発生史を生きいきとうつしだすものではあった。

イギリスから帰って間もなく，1768年6月30日の日付のうたれた〝法学研究の手びき〟 (Способ к научению юриспруденций, Слово о прямой и ближайшей) という作品のなかで，デスニツキーは法の哲学的一社会的基礎（啓蒙法哲学・自然法哲学）と各国や民族の実定法・立法との相互関係を研究している。この分野で寄与したイギリス論者の氏名記述はヒュームとスミスを最後に終っているが，かれのいうには，‘二人のうち，前者は形而上学を，後者は啓蒙哲学をそれぞれうちだして，学界の大きな満足をかちえた。わたくしの議論にして感ちがいをしているのでなければ，スミス氏の啓蒙法学はこの科学の他の全体系とくらべて，自然法学にもっとも近い’。更にここでは，スミスの情感論と経済問題が密着している本質的なポイントが述べられている。初期のスミス作品をこう評価するのはきわめて印象的であり，スミスとこの弟子の関係を明白に物語るものとして，1722年かれの用いた‘偉大な哲学者’という表現である。当時のヨーロッパ文献ではこうした特徴づけはなく，世紀末になってはじめて，この名称は通例のものとなった次第だからだ。

トレチャコフの作品中，大変に興味あるのは〝国力・国家の原因に関する今昔物語〟 (Рассуждение о причинах изобилия и медлительного обогашения государетв как у древних, так и у нынешных народов)〔1722г.〕である。各項目ことごとく，スミス思想の影響をうけている。イギリス経済学者の分業論を再生しつつ，トレチャコフはスミすを継承し，国富増加因として‘技巧の発見’を付加した。この作品は大部分，ヨーロッパ重商主義批判，とくに国富は金銀の多様性に存するとする見解の批判にさかれている。あるところなどは，スミス講義にきわめて近いのである。

18世紀の国事家や学者の間でスミスの影響をうけた人としてあげられうるのはボロンツォフ (Е. Р. Воронцов-Дашков 1783～1791年ペテルブルグ科学アカデミー総裁)，いま一人のボロンツォフ (С. Р. Воронцов 長年間イギリス駐在のロシア大使)，モルドビノフ (Н. С. Мордвинов 海将にして著名な自由主義活動家，多数の経済学作品がある）などであろう。前二者はスミスを個人的によく知っており，かれについて興味ぶかい叙述を与えているが，最後の人はスミスを，ベーコンやニュー

トンとならぶ思想家としてスミスを位置づけている。スミスがかれらをひきつけるのは経済的知識の体系だった叙述，産業の発展を主張する経済的政治的な自由主義である。

ところでまた，ラディシチェフ(A. H. Радищев)の見解にもスミスはうつしだされている。直接にこれといったかれの指摘はないが，それはソビエト学界の常識である。かれの蔵書にはフランス語版の〝諸国民の富〟2巻本があったと，B. A. アレクサンドレンコは伝えているし，またラディシチェフ研究家として知られる E. B. プリカズキコワによると，1971年5月1日付のシベリアからの，さきの A.P. ボロンツォフ宛ての書簡で，ラディシチェフはコンドルセがよみたいとか，かれの(W. N.)への注解がみたいともらしている。ラディシチェフの奴隷制への闘争とスミスの奴隷批判論は同日のもとには論じられないが，スミスの見解は，フランスの啓蒙論議ともども，広い意味ではこのラディシチェフにも影響していることは確実であろう。

ロシアのスミス学流とヂェカブリストへの影響について，一言しておこう。

1822年，プーシュキン(A. C. Пушкин)は検閲官への上申書のなかで，かれがアレキサンダー時代のすばらしい原則をほうふつさせるとし，この時代に印刷できたことを祝し，'時代の潮流というものを，知り給え，お願いだ，知識の舞台にはいるのに，われわれをたじろがさないでほしい，と述べて，短かかった自由主義時代にでた作品のなかでは，(W. N.)の訳本はきわだっているという。19世紀末にはスミスのいろいろな作品はロシアの知識階級にはよく知られるところになり，とくにアレキサンダー1世をとりまく若い自由主義一派にはそうであった。

1802～1806年ペテルブルグで4巻本のロシア語訳著がでたが，その作業は困難をきわめ，ロシア語の専門用語をもってこねばならなかったので，むしろそれに終始したきらいがある。更に，スミスがとりあげて分析した経済関係はロシアには無縁であった。しかし，欠点がかなりあるとはいえ，ロシアにとり母国語で(W. N.)をもちえたことはその後，同国における経済学の発展に大きな役割をはたすことになった。19世紀最初の4半期には，経済学といえば，ほとんどスミスの名と結びついており，学校の教師もスミスをよんでいたし，教程もスミスの記述と解釈でいろどられていたし，雑誌類ではスミスに関する論文なり，かれの個別的アスペクトの研究も出現しのせられるようになった。プーシキンもこの世間の夢中ぶりを反映してか，主人公オネーギンを熱狂的なスミス派に仕たてあげるのである。当時，スミスへの関心が高くなったのは，ロシアにおける農奴制の危機，外国貿易の重要性が高まったこと，産業問題が尖鋭化したことなどの経済的事情があったためである。

普遍的にして多面的な見解だったスミス理論は，ロシア経済思想のさまざまな方向，否，その相対立する方向にくみだして適用するのに役だった。すなわち，かれはヂェカブリストにも影響したが，同時に保守的貴族のイデオログたち，またこの国のブルジョアジーの代表者にも影響を与えた。ロシアにおいてスミス見解の力強い再生にもっともにつかわしい環境だったのはほかでもなく，ある程度は自己保存を制限し，農奴制の有害な側面を廃絶または軽減しようと企図していた自由主義貴族の活動である。かれらにとって，スミスの自然的自由という政治的経済的側面はきわめて魅力にとむものであったにちがいない。産業の発展を第一に考えるスミス見解もかれらの関心をそそったはずである。前出のモルドビノフは19世紀最初の10年代，ロシアの産業発展綱領を基礎づけているのに，スミスの分業論を活用したほどである。しかし，かれは国家的庇護の立場から考えていたにすぎないが。

経済学におけるアカデミズムの有名な代表者であったシュトルヒは19世紀はじめに，仏語でまず基本作品として経済学教程(H. Storch : Cours d'economie politique, ou exposition des principes qui determinent la proprieté des nations, T. I～VI, St-Peterburg 1815)を公刊したが，多くはスミスからの借用にすぎなかった。同時に，俗流的考え方から，スミスの価値論・収入論の，はたまた生産的労働論の批判者の一人でもあった。

ヂェカブリストの綱領には西欧の先進思想家の見解がもりこまれていたが，スミスも例外ではなく，思想家の一人である。スミスにかれらがひきつけられたのは，自由主義的な社会派の見解，たとえば，奴隷（農奴）制の弾該，いろいろな形態の封建的抑圧への反駁，工業の振興，租税の普遍性，その他である。しかし，ヂュカブリストのなかには，自由留易主義者ともども，保護貿易主義者もいた関係でフリー・フレーダーの原則はそれほど関心よばず，スミスの純理論的側面としてとりあつかわれた。革命貴族へのスミスの影響として，これを証するのが，‘自由意志の自由思想家’の源流に関して，訊問形式のアンケートにおける特定問題に答えたヂェカブリストの回答である。モンテスキューとヴォルテールの名とならんで，スミスも何回となくでてくるけれども，こと経済学に関しては，スミスのものを意味しており，かれらの経済思想では支配的であった。とくに，スミスの影響の目だっているのはツルゲーネフ (Н. И. Тургенев) であり，かれの著“租税理論の経験”（1818年）のなかにみいだされる。このなかで，不朽のスミスが確定したものとして，政策一般，国民経済，財政などの原則をあげている。

19世紀のロシア経済思想は，反農奴闘争だったかぎりにおいて，トレチャコフを

はじめデェカブリストの出現において，農工業の資本制を支持するのであって，スミスもそうであったが，何も自覚的に資本主義を弁護したわけではないけれども，たしかに自由・平等・進歩の理想的機構として資本主義がえがきだされている。少数の例外はあるものの，かれらからは，資本主義批判論はでてこない。しかし，その否定的側面はかなり色こく，ツルゲーネフは，経済学を，西欧国民の'構成的自由'を基礎づけるものと考えていたが，　スミスに接するにおよんでは，受動的に終始し，かれを展開させるにはおよばなかった。

"経済学実用原理論"というタイトルの手稿について，著者が一体誰なのかがかってソビエトの経済学や歴史学でさかんに機論されたことがある。これは，1820年にかかれて1925年に公刊された作品にして，南デェカブリストの指導者，南部急進運動家の一人と目されたペステル（П. И. Пестель）の初期作品である。その後，作者の確定について重大な疑念が表明された。けだし，この"原理"の自由民主主義的な精神は明らかにかれの初期急進主義とかなり相異となっているために，当然のことであった。逮捕時にかれの手もとにあった仏語の草稿は，かれかもしくは，他の誰かつまりゲルマン（К. Ф. Герман）教授の手になるものだった。その教授のもとに，ペステルは3回も聴講にいったといわれるもう一人の教授，バルグヤンスキー（М. А. Балугьянский）の講義ともこの革稿は似かよっている。二人の間には個々の問題で意見がちがうこともあったが，いずれもスミス研究者であり，デェカブリストに大きな影響力をもったといわれる。

著者が誰であろうとも，この"原理は"はロシア経済思想の発展において重要な位置をしめるものであり，ペステルの個人的見解というよりは，デェカブリスト全体のイデオロギッシュな基礎をなすといったほうがよく，スミスの影響がありありとうかがわれる。とくに，J. S. ミル，テュルゴー，スミスから引用して農奴労働や奴隷労働にたいする賃労働の優位点が議論されているあたりはみものの一つであろう。西インド諸島の砂糖・コーヒのプランテーションにおいて奴隷労働の利点をみとめたJ. B. セイがやり玉にあげられる，また，スミスにしたがって，国家の役割，価値生産因としての労働の生産性といった一般問題の議論のなかで，重農主義の考え方を批判に付し，イギリス農工業生産の価値評定のためにスミスが用いているデータを借用しもする。"ロシアの真実"のなかでまったくあらわになるペステル自身の見解についていえば，その形成に大きくかかわっているのは西ヨーロッパの哲学や経済思想である。ペステルはスミスを詳細に吟味し，かれを経済学の最大の権威とみなすものの，盲目的にしたがうわけではなく，批判的にアプローチする。秘

密結社にはいる若い人びとに，かれは，ヴォルテール，ルソーとならんで，スミスを読むべくすすめたといわれる。ヂェカブリストの中心綱領文献だったこの〝ロシアの真実〟は農業問題が核になっている。

イギリスふうに，土地のない農民を解放する見解を示したツルゲーネフとちがって，ペステルは，農奴制廃止後，ロシアで個人的に自由な小土地所有者の共同所有の組織をつくろうとした。スミスは大土地所有の支持者ではないが，その廃止が経済発展にとりそれほど必要だとは考えていない。人格的・政治的・経済的自由の内的統一が論ぜられたり，発展の経済条件が問題になるとき，ペステルはスミスに近くあり，農奴制，各種の独占，商人ギルド，拘束的租税などの全廃を主張するが，外国貿易の保護関税は容認する。将来の共和国を求めて，そこでスミスが考えたよりもいっそうひろい経済的機能をかれは想定する。

1820～50年のロシア反動期には，スミスの意をくむ教授たちをツアーリ権力は抑圧した。そのきっかけはヂェカブリスト蜂起の失敗であり，後，スミス学派にたいして監視の目が強まった。ツルゲーネフ作品の発禁などを含めて，ロシアにおけるこの時期の言論抑圧はちょうど，西欧におけるスミスの影響力の弱体化とセイの抬頭という史実と時期的に一致して，イギリスでのリカード随従者の出現ともども，ロシアでもスミスはなお経済学の無条件の古典として大きな権威を失っていなかったけれども，スミスを含めた進歩的学説は大学の教壇や教程でいよいよ冷却していった。

チェルヌィシェフスキーの作品には，スミスおよびこの学派（古典経済学）が決定的礎石としてねずいているけれども，チェルヌィシェフスキーの議論は，ブルジョア経済学や同時代人たちのスミス理解とも，また先人のスミス解釈ともちがって，例のマルクス評定にふさわしい独自に高い水準を保ち，かれの構築しようとした‘勤労者の経済学’の立場に立却し，革命民主主義的イデオロギーを反映しつつ，スミスにたちむかう。そのために，スミスのもつ史的階級的限界をもよく知っていた。ロシア文献上はじめて，チェルヌィシェフススキーは，スミスを全体として研究し，個々の側面だけをとりあげるのではなかった。

チェルヌィシェフスキーにとっては，スミスは‘経済学の巨人’であり，価値と労働の関係，生産への資本の関与などですくなからず，新しい発見をしているのであり，マルクス・リカード以後に経済学に登場してくる俗流経済学，とくにミッシエル・シュワーリエ，バスティア，ボロフスキー，ローシァー，レイ，セイを，この考え方に無縁なスミスと区別する必要を論じたのである。古典経済学と俗流経済学

を区別したチェルヌィシェフスキーは，大胆なスミスの科学的矛盾を当時における階級闘争の未成熟さにもとづくものとみた。19世紀中期といった新しい条件のもとで胎動し発生した俗流経済学は企図的にも，科学をブルジョアの利益とひきかえに売りわたした。マルクスの評定を思わせるように，J.S.ミルを，弁護論から区別して，スミスの最良の継承者であり，名誉ある学者だと考えて，罪とがはミルにではなく，まして先人たちにでもなく，当時の西欧文明に帰せられるものだと，的確にもかれは論断する。かれに思われるには，スミスの手によってはじめて，富は経済学の用語となったのであるが，その概念には二つの意味があり，一つは科学的なそれとして，交換価値を有する使用価値の総体とみる考え方であり，もう一つは通常の意味のであって，他人との物的状態の比較に用いられる考え方であるが，スミス学派はこの二面性をかならずしも識別せず，純科学的な考え方を，現象に属する表象的な考え方をもって，たえずぬりつぶしてしまおうとするのだと。

ふかい分析的アプローチと表面的な叙述アプローチ。この二面性かスミスにいかにあらわれるかは究明を要する問題だとしても，この評定はマルクスのにきわめて近い。更にチェルヌィシェフスキーによると，スミスの労働価値説のおもむくところ，社会主義的な結論に到着するが，それをスミスは何ら自覚するところがなかった。というのも，労働権（労働者階級の権利）がなかった当時の状態に制約されたものであろう。けれども，19世紀半ばのブルジョア経済学ときたら，スミス所説を反芻し，それを反社会主義論とごっちゃにしてしまっていると。

1861年の改革と，経済発展方向の選択はロシアではかなり広い範囲にわたって，経済学の新しい波動をよびおこした。その痕跡の一つとして，〝諸国民の富〟(Богатство народов 1866) というロシア語版タイトルの著書，およびスミス伝記ふうの普及書の発刊である。後者には，たとえば，ヤコベンコの〝スミス論〟(В. И. Яковенко: Адам Смит : Его жизнь и научная деятельность, СПБ, 1894 г.) があげられよう。70年代のナロードニキはチェルヌィシェフススキーの考え方と密着していたとはいえ，経済学やその史的役割についての虚無主義的態度は独自のものであった。たとえばフレロフスキー (В. В. Берви-Флеровский) によると，スミスやマルサスは，かれらが与えた方向が偽瞞と悪意であるにもかかわらず，社会にねざした富崇拝のために，偉大な経済学者とよばれるのだと。マルサスとスミスを同日に一括してとりあつかったり，スミスのなかに富崇拝のほか何もみないのは正しくはない。〝祖国手記〟 (Отчественные Эаписки) の編者の一人，エリセーエフ (Г. З. Елисеев) もスミミス学説と人柄について，一貫したふかい理解を示すけれども，正しからざる一

面的な理解もまぬがれていない。すなわち，スミス理論がイギリスの条件にのみ有利な見方であり，国民的刻即があるとしたり，経済的自由によみこむスミスと俗流経済学の本質的相異を区別しなかったりする点である。自然法則を経済学にみちびきいれるのはスミスの功績の一つであるが，逆に，この法則をさけようとするのがナロードニキに特徴的であるので，客観的法則という理念はかれらには大して関心はなかった。こうしたスミス論難は正当ではないだろう。‘金権政治とその基礎’という論文は（W. N.）発刊の世紀末にそのアクチュアリティとくにロシアでのそれをあらわしたものである。同趣旨の見解は革命民主主義的ナロードニキであるトカチョフ（П. Н. Ткачев）にもよみとれる。60年代の後半にかれはブルジョア経済学を単一のながれとし，そのなかでスミス・リカードと予定調和論をば区別した。が，チェルヌィシェフスキーにみられるようなふかい弁証法はもとよりなかった。

“資本論”に大きな関心をよせ，マルクスと古典経済学との間の発生史的関連をたびたびみとめるところがあったものの，ナロードニキの功績は何といっても，ロシアにおけるマルクス主義の宣伝であった。その一人ジーベル（Н. И. Зибер）について，マルクスは，1817年ジーベル氏がリカード論のなかでかれマルクスの価値・貨幣・資本の理論がスミス・リカードを継承する必然的所産であると述べているのだと注意を喚起している。

1880～90年代の自由主義ナロードニキは先人たちよりもいっそうスミスに，したがって科学には無縁であった。ボロンツォフ（В. П. Воронцов: 匿名をВ. В）は、ロシアにおける非資本主義的発展を基礎づけるために，ブルジョア経済学を否定しようとした。しかし，これははかない小ブルジョアのユートピアであり，本質的に反動的以外の何ものでもなかった。非資本主義論を特徴とするナロードニキ経済学者にとって，問題の核心は更に，市場・実現の問題にほりさげられ集的された。かれらの論証したかった点は，ロシアでは，国内市場，また外貿も制限されたり不足しているので，とうてい資本主義の開花はのぞめないというのであり，したがって都市・農村では家父長的経済をも維持すべきであると処方したのである。しかし，これは明かに，スミスに矛盾する。ナロードニキ批判を通して，スミスを科学的に解釈し，スミスのスミスらしい展開を与えていったのは何といっても，レーニンであろう。では，レーニンのスミス論とは一体どんなものだろうか。

前世紀90年代とこれをこえた10年代における諸作品でレーニンは，スミスをはじめとする古典経済学に関する全一連の評定をもりこむ。それは便宜上，三つのグループに分けられるだろう。

1.スミス学説の進歩的性格の原因なり特質の確定，2.市場問題でナロードニキの批判と関連して，スミスドグマの批判，3.マルクス主義源泉の一つとして，イギリス古典経済学中のスミス評定などである。レーニンは，スミスを原典にまでさかのぼって研究したが，とくにロシア語版の利用も怠ってはいないし，マルクスによるスミス見解の分析も活用し引用する。スミスを先進ブルジョアジーの偉大なイデオログと評したレーニン——かれのスミス評定はずっと意味がひろく，客観的に，イデオロギーを分析するとか，ブルジョア経済学へマルクス主義のかかわる正しい態度を定めるのに基礎を供することになった。スミスがブルジョア性格のものだからといって，かれへの高い評価は何ら妨げられない。というのは，かれの見解は当時の先進的階級の利益や，資本の方向で社会発展にとって焦眉の利害をうつしだしていたからである。これにたいして，シスモンディやロシアのナロードニキは，非資本主義的発展という喰わせものの看板のもとに，生産力の抑圧になりかねず，ひいては労働者の生活条件を悪くするにきまっているそうした見解を表明する点で，まさに反動的だった。レーニンはマルクスと古典経済学の共通性を資本蓄積のなかにみてとった。蓄積が多くなればなるほど，生産が消費をこえればこえるほど，すべてことがらはよくなると古典派は教えた。社会的資本の生産過程にこの見解はたちいらずじまいだったとはいえ，生産が市場をつくり消費を決定づけるという正しい規定は表現していた。この蓄積論をマルクスは古典派からひきついだし，レーニンもそうであった。富の増加がはやければはやいほど，労働の生産力，その社会化もいよいよもって急速になり，労働者階級の状態もますますよくなるのだから，その状態にはまさにこの制度が最良であるというのだが，ロマンティカーは逆のことをいい，弱い資本主義の発展を主張するのだ——こうレーニンはいった。

次に，スミスドグマと，シスモンディやナロードニキによるこの適用などの批判に，レーニンは多くのスペースをさいて論じている。　資本主義の漸次的発展が不可能だということを立証せんがために，かれらはこのドグマを利用する。スミスはこの誤論の母胎を供したとはいっても，かれらと同一の結論をひきだしているわけではない。ドグマの核心は不変資本の価値部分が欠落していることにある。レーニンは，蓄積と社会的生産物に関するスミスの見解を分析しながら，シスモンディがスミスを再現するのだけで，更にまずいことには，資本主義発展が妨げられるという結論がひきだしてしまうのだと批判した。それはかれのいう通り，明らかにスミスより退歩であった。〝市場問題〟（1898～99年）でレーニンはこの論点を処理するが，更にここで合法マルクス主義者，ブルガコフ（С. Н. Булгаков），ツガン（М. И.

Туган-Барановский)，ストルーヴェ（П. Б. Струве）などを，スミス蓄積論に十分注目しないかどでかれは批判した。レーニンにいうには，スミスの誤論ともいうべき不変資本部分の欠落と，個人的消費に生産的消費を解消する混同とを訂正していくことは，マルクスに，社会的生産物の実現理論を与えしめることになったのだと。

スミスの名声と見解は，ロシアの革命家対小ブルナロードニキとの闘争をうつしだして，理論をめぐる議論のうちに一定の役割をはたすことになるが，レーニンはスミスの役割を上のようにマルクス主義形成のなかにみた。

次いで，ソビエト時代プロパーなスミス研究はそもそもどうだろうか。

ソビエトロシアでも，学者の論説，生活，活動に関する研究が多い。その場合，マルクス主義の源流となったスミス学派の科学的側面を，西欧で資本主義弁護のために用いられる俗流的側面と切断して，把握していく課題も解決される。マルクス主義者のほうからもスミスへの関心と敬慕のあるあかしとみなせるのは，75年，東独科学アカデミーと，ハーレ市のマルティン・ルター名称大学により，スミス研究の国際学会がもよおされたことである。

ソ連でも，(W. N.) は四つの版を有し，一つは簡略版であるが，あと三つは全体版である。いまやスミス全集の完結版を準備出刊する時期にきている。外国，とくにイギリスでは過去何年間，スミス研究の経験が蓄積され，未公刊のものも利用されているようであるが，こうしたコメンタールともども，(W. N.) 完結版発刊がさしあたり必要である。スミスは経済学者にとどまらず，哲学者，社会学者，歴史家，文献批評家だったので，かれの (M. S.) は経済学へのスミス評定を確定するのに大切な作品となるわけだが，これはロシアでは19世紀になってやっと飜訳されたにすぎない。歴史や言語学の文献は一切この国ではまだ陽の目をみていない。

20年代にすでにスミス研究のモノグラフィーはあった。生誕2百年を記念したシュタインの作品がある。作者はここでスミスに関する尨大な資料を学界に公表した。が，その資料はアメリカではすでに19世紀後半に出刊ずみのものであった。マルクスが研究したふかいスミス分析の利用もすくない。スミス見解を議論したものとして，24年版 (W. N.)（ソビエト初版）にのったリャシチェンコの (П. И. Лященко) の序論文がある。また，スミスは，ケネーやリカードとともに，科学的社会主義の先駆者たちの選集シリーズ第1刊用に選ばれて，このシリーズのあとがきで，ウダリツォフ (И. Д. Удальцов) は学生や学者にとって，欠かせないものとして，マルクス前の経済学研究の必要性を表明する。

スミスを独創的にふかく究明した人にして，経済思想史家のうえで異彩をはなっ

ているのがローゼンベルク（Д. И. Розенберг）である。この分野でかれの教程(1940年)は今日でもこえられぬ高い水準を保っている。とはいえ，60年代と70年代には，この種の著書は十ばかり出ている。レーウェルの作品もそのなかですぐれたものの一つである。前述のことを，以下，文献にしばって，列挙すると，次のようになるだろう。

В. М. Штейн: Адам Смит, личность и учение, Пг., 1932.

А. Смит: Исследование о богатстве народов, Пг., 1924.

Кенэ, Смит, Рикардо в избранных открывках, М-Л., 1926.

Розенберг: История экономической мысли, Изд-во МГУ 1961.

———: История экономических учений, Соцэкгиз, 1963.

———: История экономических учений, Изд-во Мысль 1965.

А. Л. Реуэль: История экономических учений, Изд-вВП 1972.

更に，スミスのをも含む，経済思想史の領域における戦後作品としては，次のものを付加してもよいだろう。

Вл. С. Афанасьев: Этапы развития буржуазной политической экономии, Изд-во М. 1971.

П. И. Заррни: Английская классической буржуазной политической экономии (А. Смит, Д. Рикардо), Соцэкгиз 1961.

Л. В. Левшин: Критика теории стоимости английских буржуазных экономистов, Соцэкгиз 1961.

В. Н. Черковец: О методологических принципах политической экономии как научной системы, Изд-во МГУ 1965.

アファナシェフのは現代ブルジョア経済学のスミス論を批判しており，またザッリンの作品にもかれなりのスミス評価があるが，それは形式的で限定されているので，欠陥はまぬがれない。

スミスの生涯と創作に関するいわゆる伝記類としては，最近のものとして，次のものがある。

А. В. Аникин: Адам Смит, Изд-во Молодая гвардия 1968.

———: Юность науки, Жизнь и идеи мыслителей-экономистов до Маркса, Изд-во 2-е Политиздат 1975.

スミスの W. N というこの作品は社会思想のもっとも巨大な金字塔の一つだけ

に，レーニンはそれなりの高い評価を与えた。ロシア経済思想のうえに，スミスの及ぼした先進性とその役割を高く評価したい。

5. どのような作品にしても，真偽を選別するもっともたよりになるものは時代の経過による試練である。スミスの作品こそこの試練に耐えぬき，2世紀をかぞえた今日でも，基本的な考え方をめぐる分析ではとめどもつきせぬ主たる潮流となっていることできわだっているといえるだろう。その作品とはもとより，〝諸国民の富〟のこと。これが歴史的にはたした役割は一義的には理解できぬけれども，これを決定するのは，まずもってこの作品が過去の経済学史のうえで一体どのような新しいものを寄与したか，いかなる解釈をそれは与えたのか，そもそもどのような問題をあらたに提起したのかという点であろう。また，どういった方向にそれが起点として役にたち，今日，これが発展してどれほどの重要さをもっているかなどによっても，それはきまるものであろう。

当時でも，この作品の普及はめざましく，経済学システムの構築をはじめてかれは企図してこの科学の領域を確定した。マルクスの指摘をまつまでもなく，スミスにしてはじめて，経済学は全体的なあるものに展開し，それがとらえる領域も何がしか完結した輪郭をととのえたわけである。当時に存在した最良の伝統を継承するだけに，この著作は経済学の法則を，人びとの意志いかんにかかわりなく，客観的に作用する自然法則として説明した。かれの場合，自然法則とは，史的に可変な資本制生産方法の法則であるはずのものが，永久不易の法則として把握されている。が，それにしても，自然法則という考え方それ自体は積極的な役割をはたすのであり，この重みをレーニンはみのがさず，ストルーヴェなどとの論戦でこれを強調した。というのは，ストルーヴェはこの自然法則が破綻にひんしているとみたからだ。‘社会主義のいま一つの絶滅’という論文のなかで，レーニンは例の考え方を反駁し，自然法則の曲解を難じた。古典派は自然法則を探究したけれども，この経過的性格なり，内部の階級闘争をみぬけなかった。自然法則は，機能や発展のなかで瓦解にいたることなく，いよいよつよまるのだというのがレーニンの見解である。

自然法則論は主観学派に打撃を与えた。もともと，スミスを主観学派ふうに解釈しようとするこころみはいろいろな時期にあり，スミスに主観学派の同調者をみさだめようとするが，それには何らの根拠があろうはずはない。これに関連して，注目したいのは，主観心理学派のブルジョア経済学はスミスのこの作品を評価せず，あまり大切にもしないことだ。

経済学と政策論の区別をスミスは形式上みないものの，なお〝諸国民の富〟のなかでかれは重商主義も重農主義も全体として，経済学のシステムだと名づけた。前者を商業主義的システムと別称したり，後者を農業システムの変型としてエコノミストとも名づけた。こうした経済学のシステムをあつかう第4編のうちでは，経済学の任務を経済政策的課題とみなす。が，相異となるシステムを研究して，いずれの経済政策が自然法別に一致するかに応じて，スミスはそれを区別した。政策に多くの注意を払ったスミスは，この作品を経済学の法則からはじめて，政策の一定方向をば，経済学の自然法則に一致するかしないかの観点からとらえようとする。注記しておいてよい点は，実際，分析の進行のうちで，かれは人間自然の本性から生じる客観的政策—経済的法則を経済学の規範(ノーマティブ)的な課題から区分しようとする。政策的課題はつねに法則発見の衝動であるが，法則と規範を混同することは経済学の発展にけっして寄与しないが，これは現代でもあてはまるだろう。

〝諸国民の富〟から2百年をえた今日，レーニンが例の前掲論文をかいてから62年が過ぎる現在，なおこれについて論じうるゆえんのものは，われわれには否(いな)はないにしても，是(しか)りの内容が混同だけではなく，その混同から生じる思想上の混交が必然的なことを基礎にしている点をそれがもつからである。自然法則の発現する条件づくりにのみ任務を有する規範的課題をみとめるがゆえに，重商主義を制限・排他の逆行システムとして、これを批判する。けだし，それは，各人に固有な理性にしたがって，自分の利益を追求させるかわりに，特定部門を異常に優遇したり，他部門を逆にまた，非常に冷遇するからだ。

農業労働だけが生産的労働だとみなす重農主義（エコノミスト＝フィジオクラート）の限界を克服して，スミスは自然法則に訴え，これを守ることのみが病を癒やすとしたフィジォクラートの見解を高く評価し，それをまったく支持する。しかし，農業のみに生産的労働をかぎってしまう点はスミスの批判するところであった。

資本主義社会を商品生産の形態として研究するさいに基本的なのは商品の理論であり，これにスミスは確実に寄与している。すなわち，使用価値を一定の対象が具有する効用と解し，交換価値の大いさが使用価値の大いさとまったく無関係だとした。冒頭で使用価値と交換価値のパラドックスにふれてそういったのである。労働価値説のエレメンタルな規定は現代ブルジョア経済学批判でもアクチュアリティをもち，交換価値を使用価値からひきだす論者の考え方を克服するのに役だつ。基本関係としてスミスは労働関係をみるが，これとてもアクチュアル。というのは，労働の関係は商品関係にとってのみ本質的だからだ。

スミスは価値を形成する労働の二重性を与えそこない，価値形成労働の真性をみなかったにもかかわらず，なおその具体性を捨象して量的にのみ比較できるような労働から発足した。価値を形成する労働を特徴づけるにさいして，若干の欠点があるにもかかわらず，〝諸国民の富〟では経済学史上はじめて，価値因として労働を経済的に展開するという壮挙をなしとげた。だからこそ，スミスやリカードが経済機構を研究して，労働説の基礎をきづいたので，マルクスがこれらを継承していったのだと，レーニンがいうのだろう。

労働価値説にもとづいて，利潤をスミスは労働者が支出した労働の控除だという。その支出労働は，かれによると，労働者が材料価値に付加する新しい価値部分であるが，これは二つの部分，つまり一つは労働者への支払分，もう一つは企業者の利潤支払分からなりたつ。利潤をこのように控除部分と位置づけるかと思えば，これとならんで別ないま一つの説明をもスミスは与えるのだ。そうはいっても，主要な主張は控除説でいろどられる。当時の考え方によると，たいていは，利潤は他の所得と同等に価値源をなし，その利潤は，今日でもブルジョア経済者のいうように，管理監督などの独自な労働への対価であり，もう一つの賃金なのである。これは現代の弁護論文節を想起させる意味でアクチュアルである。だがしかし，利潤は賃金とは似てもにつかぬ本性があり，別な原則にたっているのだとスミスはいう。監督・管理の労働の量・重さ・複雑性に，利潤の多少が照応しているとは思えないというのである。

スミスは剰余価値の析出にいま一歩だったが，これにはついに未到に終った。が，ブルジョア社会の所得源を理解するのに，多くのものを与えたのはたしかである。そして，スミスの〝諸国民の富〟は所得の階級分配の系統だった一つの見本であり，それだけに十分に大きな科学的道標だと評価してもよいのである。だが，この作品の史的役割を理解するためには，大切な何がしかの事情を若干考察してみる必要があろう。

スミスは，中世の経済制度や封建関係を，更には重商主義経済政策を批判したが，フリートレーダーつまり普遍的自由主義の原則を闘いとることこそ当時は進歩的で重要だっただけに，レーニンの評定したように，先進ブルジョアジーの偉大なイデオログであったといえよう。〝諸国民の富〟では反封建的な要求が政治経済的に基礎づけられているのであり，これをうけとめてレーニンもかれを評価したが，このことは，18世紀におけるブルジョアの史的役割がいまだ，客観的経済法則を私心なく研究させる可能性をさまたげなかったという史実をレーニンが念頭においたからに

ほかならない。〝諸国民の富〟はまさにこうした史的背景をひかえた時代の産物だったのであり，古典経済学というブルジョア経済学であるにしても，そこでの経済機構を料学的に認識していった結果なのである。当時，社会的進歩の利益を代表するブルジョアジーという階級を，いまいちど代表するブルジョア経済学は、とらわれず恐れることなく，資本制経済の諸関係を研究し，それを人間性に合致した自然法則として，大胆にもそこにある矛盾をかくそうとはしなかった。しかし，次の世代のブルジョア経済学はこの矛盾をとりあげ研究する必要に迫られたが，このあかしがほかでもなく，階級対立の経済的基礎を直接に分析していったリカードの作品だ。かれは労資間の対立というブルジョア社会の決定的矛盾を指摘しえなかったにせよ，経済学的に，階級利害を経済的に説明したことは重要な点であった。経済学の範疇は以後，この矛盾と直接に結びつけて研究されだすのである。

〝諸国民の富〟はシステムをととのえた経済学の創出見本であり，生成した諸範疇の研究例であるが，同時にこの総体をなす要素をやはりシステムだててすみずみまで結合する経験でもある。この課題はたしかに，スミスでは未完にとどまるとはいえ，何よりもまず価値論で提示する。

ブルジョア社会を自然的秩序とみたスミスはこの機構が発生し確立するために，経済の発展において生じてくる形態をみとめなかった。スミスが資本制生産の外に知っていた社会は，同じ商品生産ながらも初期の段階にすぎないもので，かれの名づけた原始社会である。この史実を固定化してしまって，かれは一つの形態からもう一つの形態への移行をみずじまいになった。

この課題は理論的にもひじょうに複雑である。というのは，スミスの後継者リカードがこれを解決できず，消し去ろうとして，資本制商品生産の範疇をかりて，当初の商品生産を分析しようとした点にもあらわれている。二形態の商品生産間の相互関連を提示して，スミスは例の作品で理論的にも方法的にも大切な論点をだしたが，ついに確定はできなかった。しかし，問題の提示にはかれの功績は大きい。

認識水準のことなる範疇を一つの筋でのみかれは提示し研究した。上向の水準を異にした範疇を無雑作に理解するふりがうかがわれる。この特徴をマルクスは二つの筋上の研究をまるで同一の原理で結びつける考え方と評定した。二つの筋とここでいうのは，経済関係の内的連関をときあかすエソテリッシュなものと，表面の現象にとらわれた研究としてのエクソテリッシュなものである。だが，まったく同一範疇の内容を〝諸国民の富〟ではページがちがえばまったくちがったふうに議論されるのである。スミスにあっては，エクソテリッシュなものはエソテリッシュなも

のと同じく，範疇の科学的認識にとってのモメントであるが，かれが科学的でないのはエソテリッシュなものと同等または，これにかわるものとして考えられているからだ。それに関連して強調しておかねばならないのは，マルクスのこの２分法が独占への移行の結果として発生した問題ごとに，ブルジョア経済学批判を高めていくのに，とても大きな方法的意義を有するという点だろう。エソテリッシュなものをエクソテリッシュなものにとりかえるのは現在，資本主義変質論や計画資本主義論ですでに日常的となっているが，独占超過利潤の抽出における計画的仕方をもって社会的生産の計画的組織と弁護論的にすりかえてしまうのに，これは恰好の方法的支脚をなすものだろう。

更に，エクソテリッシュといっても，スミスと現代の相異も考えないわけにはゆかない。かれの場合，エソテリッシュなものはエクソテリッシュなものを排除しないで，並存しているけれども，現代ブルジョア経済学ではエソテリッシュなものにかわってエクソテリッシュなものが横行する。そしてエクソテリッシュなものを求めるべく，スミス遺産のなかにはいりこみ，ここから俗流経済学システムを展開する。そして個々の俗流経済学ばりのスミス叙述を，とくに高揚したり賞味したりすることが生じる。しかし，これはスミスのあずかり知らぬことだ。ここから客観的法則を拒むとか，政策課題と法則認識を混同するとか，経済学のシステム欠落を善とするなど——この舞台でとくに活躍しているのがサミュエルソンである。

スミスに二つの方法が共存しているのは，かれがとらわれず公正であったことのあかしであり，経済学構築作業が未完だったあらわれであり，ブルジョア視角でこのシステムを仕上げるのが不可能だということの表現でもある。これはリカードだって同じだ。かれにあっては，理論を単一の基礎に還元しようとして，商品生産の形態発展を否定したり，そのモディフィケーションを無視することになったりする。マルクスはスミスのこの二重議論を批判したが，これは現代ブルジョア経済学の批判にたいしてだけアクチュアルだというのではなく，社会主義経済学システム構築が体験している欠陥の克服にとってもアクチュアルである。社会主義経済学システムに現存の社会関係をとりこみ，相互に関連する範疇のシステムとして，その運動を明かにするにしても，範疇を一面的に配置することになれば，課題は正しく解決されたことにならないだろうし，システムの位階秩序を否定したり，エクソテリッシュ—エソテリッシュを無差別にとりあつかうことになってしまうだろう。エソテリッシュな範疇を析出し，これらの間にある必然的な関連を発見する能力は，科学の発展過程で生じてくるのであり，新しい内容でゆたかにするときにかぎって

重要になっていくのだ。この意味で〝諸国民の富〟における欠陥は経済学システムを構成するさいの最初のこころみとして，小児病としてのみならず，科学が漸進的に運動し発展する困難とも考えなくてはなるまい（社会主義のもとにある範疇すべての重みが同じか相異となるかを声高く喋々する人にかぎって，理論を現実に近づけるという外観の下に，システムのヒエラルヒーのある現実を軽くあしらうのであるが，それは科学そのものの発展や，それを計画・指導・管理のしっかりした科学的基礎にかえていくのにはけっして役だたない。かれらは，経済学の方法的欠陥を，何とかしなくてはならぬことがらから，その任意事項にかえようとするが，この考え方は，いまや苦悩にみちた体験下にある社会主義経済学の単一システム構築に確実に妨げるはずだ）。

社会主義経済学の展開は経済発展のふかい経験なくば不可能であるから，現実過程をスコラーふうの議論にかえてしまうやり方と闘わねばならぬ。この場合にも，スミスの状態が教訓的だ。かれが剰余価値を一定の範疇で表現せずこれを利潤と混同した点で，かれをマルクスは批判したわけであるが，粗雑な経験主義論だけが虚偽の形而上学，スコラー主義になりはてたり，反論しがたい経験的現象を，直接じかに，たんなる形式的抽象によってまたは一般法則からひきだしたり，狡知にもそれを法則にすりかえたりするのだ。しかし，よき理論ほど実際的なものである。

マニュファクチャー時代の科学的文献としての〝諸国民の富〟で提起した富原因という研究問題とその回答は，当時の，かれが代表する階級の出刊物としてではなく，個別的な生産当事者と社会の利害調和のうちにかれは考えようとした。形式上ながら，この論点が関心をひくのは，社会主義の現段階で科学技術革命の条件があるとか，二つの体制が存在するもとでは，まず生産効率の問題を提起するからである。スミスにとって富の源泉は労働なのだが，フィジオクラートとちがい，すべての労働なのだ。しかし，生産的労働／不生産的労働の区別をかれは終始，忘れずにもちつづけた。方法上，大切なことはスミスが社会的労働を富決定因つまり生産効率の要因として，生産的—／不生産的部門に配分する比率をもちだした点にある。

ここでは，もとよりスミスの与えた解決を分析・評定するつもりはないが，重要な点は生産的—／不生産的労働に関する問題の提起は現代でも意義を有するばかりか，更になお大切なことには，現在，二つの領域に関連して出現している社会的労働の部門差をぬぐいさる方向にたいして，この問題に関する若干のアスペクトが理論的防壁になっているということにある。これは物的領域とその他の領域のもつ独自な意義を否定しかねない。収入とではなく資本と交換される労働のみが生産的だ

とみて，スミスはまず生産的労働論の社会経済的アスペクトを案出するが，このアスペクトは経済学システムにおける上向過程で考察すべく，大変に重要なところである。スミスの生産的労働論は今日でもなお重要であり，二つの目ろみにしたがって提出した点が本質的である。かれは生産的労働が増加する技術経済的要因を，その時代の制約に甘じながら，研究分析する。すなわち，有用労働の生産性の増大はまず，労働者の熟練と知能に依存する。後者は分業の発展度によってきまるから，分業が生産性増大の主要因となる。しかし労働生産性向上の物象因，労働用具の改善は微細にふれられているわけではなくて，副次的なものとしてあつかわれている。社会的生産効率が向上する課題がますますアクチュアルになり，その基準の開発が技術経済因だけでなく，すべての要因を動員することを必要条件とする現代では，これを強調することが何としても欠かせまい。

もう一つ。効率向上の社会経済的要因としてスミスは自由な競争条件の創出を考えた。資本制生産に内在する関係者の利害の対立＝反目因を企業家（製造業者と商人）が社会を犠牲として自分に有利な独占的条件をつくりあげようとしていることにみてとり，特定部門の商工業を代表する人びとの利害がつねに何がしか社会の利害とくいちがい対立さえするのだとスミスはいう。業者の志向する競争制限や独占に反対するのがスミスであってみれば，現代にスミスは進歩の方向で大きく生きる。とはいえ，現代独占とスミス時代のとはかなりちがうので，いちがいに論証しがたいけれども，それでもなおスミスの反独占的議論は今日でも有効なのだ。独占にかわって自由競争を主張するのはちょっとみると，アナクロニズムのように思われるが，新しい形態の反独占のシステムである。すなわち，資本制社会化の過程で生ずる現代独占にとってかわるのは昔の自由競争ならず，社会主義関係であり，これをもって資本制経済をかえるのである。競争の条件づくりが個々の生産当事者に有利なのはつまるところ，社会にもそれが有利だからだとスミスは考えたが，この特殊ブルジョア的な競争論信頼はたしかに中世型独占への闘争において，まったく現実的な性格をもっていた。水準を異とする利害得失についてのスミス議論の重要性はその解決にたとえブルジョア的限界があったにせよ，強調に値いすることだ。資本制生産は個人資本家にも社会にも唯一の効率基準として利潤率があるが，この基準は，相異となる階級利害が所得ともども存在している資本制経済全体にとっての効率を示すものであろうはずはない。

社会的生産の効率は相異った生産方法の社会によって，ちがう基準をもつにしても，生産力の観点からすると，相異なる社会に共通なのである。効率基準は生産力

からすると共通なのだが，社会経済的観点からは，特殊的にさまざま。スミスの起点とした基準は経済人であるが，そのモデルに立却する基準は資本主義ではともかく，こと社会主義経済では現実的たりえない。けだし，ここでは基準は基本的経済法則が律するので，資本のもとでのように個別基準の合計が結果として生ずる全体の効率になるとは考えられぬからだ。企業のホズラスチョート形態と結びつくローカルな基準と全社会の経済基準とは大きく次元を異とにする現象であり，しかも第一次的に大切なのは前者ならず後者だ。経済学の基本的な領分の一つにはいるのは，かれスミスが経済学と経済政策を区別したことである。国家の経済における役割はスミスが生きて仕事をした時代よりも，今日ではいっそう身近な問題となっている。

注目すべきことに，この問題には二つのモメントがある。一つは私企業と国家との相互関係。私的創意の無際限な力を信じたスミスは，物的富をつくるのに国家の関与が可能かつ必然的だということをけっして否定しなかったし，この場合，最近の文献で名づけられるインフラストラクチュアーの要素を考えにいれていたように思われる。橋架・運河・港湾など，この領域に属する物件であるが，それは社会にはたしかに最高の重要度をもつけれども，個人やそのグループには支出上，手におえないし採算のとれるものでもない。こうした負担に耐えきって保持できるのは国家である。スミスはこう考える。

スミスの問題提起はしばしばケインズのと比較されるが提起の作法がちがう。すなわち，ケインズでは私企業は固有な内的法則で再生産できかねるから，たえず再生産するためには，当然国家の経済干渉という外部の力にたよらざるをえないし，総じて，自由営業にもとづいて富増加を調和的にふやすという考え方を疑問視する。ところが，スミスには私営業制度こそ侵されてはならぬ基軸である。そうはいっても，かれにあっても，特定の物件はこうした原則の枠外にたつので，多少とも正確に，この一群をあげている。こうして両人の間には，原則の相異がある。

私営業が何ら非難の余地なく，国家の干渉なくては，否，ない方が社会的に富をふやせるものだと考えて，スミスはこの社会秩序を弁護したのにたいして，ケインズでは私営業はそのメカニズムだけのなかでは自由に再生しない有機的欠陥を有するとみなす。が，なおこの秩序は維持していかねばならぬのだから，その存在をはかる制度をつくりあげる必要を宣伝する。それが国家の経済干渉。現代ブルジョア経済学も大部分，２百年前よりは比較にならぬほど，国家の方策を求め，なかには徒ずらに資本制生産の計画化を主張する人すらいる。

経済と国家の相互関係は現代では，自由主義時代と異となってアスペクトを若干

異とにして，かつて国家とその活動家が社会の上部構造だった状態にかわって，性格をまるで一変した。すなわち，当時，スミスはブルジョア所有の守護人として国家を特徴づけ経済政策の主体として，それを位置づけたけれども，ここでは国家は生産関係の主体という新しい性格をおびて，経済関係に干渉を加える。

政策の主体として国家は，まえと同様，社会的上部構造の要素をなすことにはかわりはないが，社会化の発展，とりわけ独占形態とか生産関係自体の変化とともに，資本の矛盾も国家が直接じかに干渉するのでなければ解決しがたいところまで激化する。国家はこの場合，政策課題を解決すべく特定部門に国家投資を向けて，自ら生産過程でじかの生産関係者になっていき，社会の基礎機能という新しい仕事を追加的にひきうけざるをえない。国家はいまや，政策の主体であるとともに生産関係の構成主体であり，社会の上部構造たるとともに，基礎でもある。ただし，このことは生産関係の変化によるので，国家自体の進化から生じるのではない。また，社会主義経済でも資本制生産と異質であり，しかも事情も複雑であるにせよ，国家のこの変化という点では同じである。その変化をみすえて，スミスの特質を確定せねばならないのだ。これが第２の点。

〝諸国民の富〟は経済学史発展の大きな分岐点の一つだけに，この作品を先行する経済思想や経済学のいっそうの発展と関連させて解明していくのは理解の知識をふかめる方法であり，この過程でマルクスやレーニンの評定を利用すると，なお更，理論的方法的にそれをわがものにできることであろう。

第１のアニキン論文は，特定の論点にしぼられるというよりはもう羅的にして，強調点もかならずしもはっきりしないが，しいていえばスミス理論の批判的概要といってよいかも知れない。もちろん，かれ独自の問題意識からするスミス解釈として，マルクスに発展するスミスの特質をまとめるとか，とくにスミスに特有な二面的矛盾をいろいろなところで指摘しているようである。

これにたいして，第２論文はいろいろと視点を設定して，そのつどこれに集約しつつ，スミスをまとめている。しかし，論述の内容に一貫した特定の論点があるわけではない。この点では，さきの論文と類似する。

それゆえに，二つは一セットとみなしてもよいだろう。

ところが，あと二つの論文を含むもう一セットのほうは，成否は別に，スミス論としては，たしかに専門的で，問題点を特定している。

第３のアファナシェフの論文はスミス理論の矛盾を微細にわたって各論的に指摘

し，この根基をかれなりにさぐろうとする。すくなくともスミス矛盾に論点をしぼった論述だけに，叙述の濃度も比較的に高い。

また，第4の論文も，スミス思想と，ロシアの経済学や社会科学ならびに経済思想との関連をとりあつかうもので，この国の文献ではそう珍らしくもないだろうが，わが国を含めて外国ではさほどポピュラーでない問題点をテーマにしている。テーマがテーマだけに，貴重な材料や有益な示唆をかなり与える。スミスがいかに多くロシアにかかわり，これに答えてロシアのほうからも，スミス研究の成果がすくなくないことや，スミスの摂取がロシアの革命運動の実際にも栄養分を供していったことが述べられる。しかし他面，スミスのことでロシアに結びつくことはすべて，意義の軽重の差や収捨選別を度外視して，枚挙するふしもなくはないので，スミスをこちらにとりこむ，多少ナショナリスティクな感を払拭しきれない。しかし，スミスが社会科学，経済学のなかで，かれ個人の理論をこえて史的に展開をとげていった過程を，そのミニチャともいうべく，このロシア一国に集約して，動向をフォローしスミスを整理するあたりはさすが正しい視点であり的確な手法の行使だと思う。

最後に，のちにいたって追加したツアゴロフ論文はスミスと現代を、時論テーマにしぼって，直接じかに関連づけようとする。時論のスミスへの回額というべきか。それだけに，ほりさげがそうふかくない。

ところで，すべての論文にわたってスミス論の論評をおこなう余裕がないので，ここでは第3論文が問題にしているスミス矛盾，そして最後の論文がめざすスミスの現代的再生論についてふれておきたい。これとても，かならずしも評者の見解の再検討にふかくはいっていけないことをここに，予めことわっておきたい。

スミスを論評したこの論文は，批判的解明に成功しているかどうか，設問した問題意識を的確に実現しているか否かはさしあたり別にして，きわめて大切なしかも興味のある論点を含むので，すこしばかりほりさげ，スミスの二重性を確定しその歴史としての矛盾の意義をさぐるのと合わせて，この評者のスミス解明をもちょっと検討してみたい。

スミス理論に一貫して内在する科学的と非科学的との二面性が法則的であり，かれには解決できなかったにせよ，解決に役だつ材料をあるいはその解決が科学の前進につらなる問題を提示した点に，スミスの科学的理論への寄与を求めようとするのはたしかに，そのとおりであり，正しい。また，この二面性をスミス方法にねざしたものとしてとらえ，その一貫した性格の矛盾を個別的論点にまでほりあて具体的にとらえる。そればかりではなく，この具体化を詳細にしかもひろく論述する。

この点でも敬服すべく，その労を多としたい。

だがしかし，ちょっと考えてみると，まるで明らかなことであるが，現象理解の二面的把握がスミスに特有な方法であり，この方法が個々の理論局面でもくまなく一貫して輩出しているというだけでは，二面性の指摘なり確定ではあっても，その解明や説明ではないだろう。よくみうけられるように，二面性をスミスの資本主義観に求めても，問題の解決にはならない。これでは，特定理論をその生成の経済過程に慢然ともってくる，当らずといえども遠からずといった相対主義なり，大は小をかなうのあいまいさなりの類(たぐい)にすぎす，けっして核心に的中していない。問題は，スミスの方法を資本主義観やその歴史段階でうけとめて拡散してしまうのではなく，逆に史観や存在の歴史をかれの方法（理論）に集約しなくてはならないという点にこそあるだろう。そこまで問題をつきつめなければ，二面性の説明にはならず，説明の任務を完了したとはいえないのではないだろうか。

二面性が物体と影のごとく形影相伴うというのは，スミスが私有社会を，そのほりさげたところではなく，表面でうけとめるにとどまり，これにとらわれて区別すべき実在の二面性をごっちゃにしているからである。私有に特徴的なことは，任意の社会にあるはずの扶養因と支配形態から成りたち，しかもそれがそれぞれ被支配形態と被扶養因に対応して相互に敵対的であるということだ。私有(プライベート)—という語義がすでにこれを明らかにする。すなはち，扶養因は被支配の形態をおびて現象するし，支配形態の本質は被扶養因にあるが，扶養因は運動の発源として休止することなく，運動そのものを生みだすけれども，この運動の活力は支配形態の吸収するところとなり，更に，被扶養因の培養に転化し，他から派生した力をもって支配の機能を遂行し，運動の発生源であった扶養因を被支配の性格で再規定する。つまり支配形態（被扶養因）は扶養因（被支配形態）から運動をうけとり，後者に力をのこさない。それだけならまだしも，更に，とりあげた運動の活力でその扶養因をかんじがらめにする。したがって，何が何を扶養する（ halten ）かの因果の方向と，何が何を支配する（ kraftigen）かの因果の方向とが逆行するところに，私有の敵対性のもう一つのとらえ方をみてもよいだろう。やがてこれは，社会を支える生産関係 (Produktionsverh a l t nisse) と生産力(Produktivk r a f t)となってあらわれる。社会を養うものが，つねに抑圧に運命づけられ，支配形態は逆にどこでも被者(告)にすぎないということである。二つの方向で因果が逆だといったが，その因果は一つは支配の方向であり，もう一つは扶養の方向であって，異質の筋道である。

更にいえば，扶養因が被支配に宿命ずけられるかぎり，内因と形態は二者闘争的

にして敵対的である。内因の運動は休むことがないから，敵対的なフリクショナルな動きもまた止ることを知らない。しかし，この運動のいきつくところ，いつの日にか内因が形態をうちぬき，止揚する状態が到来する。つまり，扶養因がその次元での支配形態に上昇する日がやってくる。その瞬間，支配形態なるがゆえに，それは被支配形態としての扶養因を新しくもち，因果なことに，立場をかえて再びこれに対決せざるをえないし，そのかぎりで支配形態はまた被扶養因となる。支配形態は支配されるが，そのたびごとに扶養因は扶養を更新する。私有社会はこの反復過程のなかで運動し史的痕跡をのこす。

スミスでは支配と扶養，制約と決定の逆行性が同一の方向で二重がさねとしてとらえられてしまうが，このなかで再び二方向の相異を区別する。混同のなかで区別を再現するわけである。スミスにおいては支配と扶養，力と関係がごっちゃになり，たとえば，交換力 (exchanging power) となったり，購買力 (purchasing power) になつたりする。このなかで再び交換とその力を，購買とその力を峻別する。スミスにとっては支配することと扶養することは同じなのである。資本家や企業者は支配者であるが，社会の組織的扶養者なのである。二つの相異となるはずの性格が同一人格に求められる。これを異人格にわりふって，相互の敵対性を結論づけたのがマルクスであり，かれのあれほどほこった二者闘争性は，このあり方の商品内的集約なのだ。だが，スミスのこの二面性は，私有を超歴史的な社会とみたことに発生的には制約されるのかも知れないが，むしろこの方法的二面性がスミスの社会観を内在的には決定しているのである。スミスの資本主義観はこの方法の前提であるが，同時にこの方法によって媒介的に決定される所産であるといえるだろう。

混同したものを再びそのなかで無意識に区分するところに，スミス二面性が現象する。この無神経な再区分ぶりにこそ，スミスの正しい科学的良心，とらわれぬ洞察本能がにじみでる。これが理論のいたるところにあらわれることは評者が詳述してくれているところである。スミスは支配と扶養の現実的敵対関係を，支配のうちにいれこみ，したがって敵対関係を解消するかに思われるが，その途端，私有に内在する客観的な論理の報復に会い再び敵対性を，これを否定する衣のもとで再現してみせ，二面性を，結果としては敵対性を不本意に，生みだすわけである。

支配形態のなかでの敵対性の再現は，生産力と生産関係の相互関係のうちにみられるように現実史的状態である。いずれも，歴史の形態として支配が専制的にすべてを着色する。しかし，同時にこれをうちぬいて敵対に逆行する関係も作用している。後者の確証のためには，支配そのものの領域をこえて，支配と扶養の二つにま

たがるいっそうひろい領域をみとめ，ここで固有な敵対性を認識し支配形態内部の敵対性がこの固有な敵対性で内面的に決定されているのだということを理解する必要がある。内面的うらうちは敵対性をどこでも堅持させる確実な保障である。それは動揺を防ぎ，後退を妨げ，二面性からも解放する。スミスは支配形態に注目するかぎり，現実に立却するのだが，固有な矛盾にまでほりさげなかったので，理論の波間にただよう小舟のように間断なくほんろうされるはめになった。

スミスは敵対性が運動する現象局面として，二つの側面をみとめる。これは敵対性確証の前提であり入口である。しかし，運動源としての扶養因と，二側面を含む支配形態との二重性を折出し，二面性を二重性の現象だとスミスは把握していない。この二重性こそ固有な矛盾が安住するところ。二側面の現象を二重性の内的理解からとらえ直すか否かが論述の科学的か，十分でない科学的かを裁断する試金石となるだろう。

だがしかし，完全に科学的理解が仮りにも二面性の形態局面にとどまったならばおちいるし，そう理論化せざるをえないだろう——そこうした矛盾にみちた発言のすべてをスミスは用意周到にも与えている。逆にいえば，スミスは問題の解決を与えるすべての加工材料を提供している。解決の成否はもっぱら二側面にかかわる経験主義をうちやぶり，核心のある二重性に，それゆえに，二者闘争性にだどりつくことにある。〝資本論〟冒頭にある商品の二側面——二重性——二者闘争性は私有社会の本質解剖の凝縮であり，スミス矛盾解決の正確な方途と手段をも示している。〝資本論〟のこのあたりの規定は，スミスの価値・交換論を批判的に照射するだけではなく，さきのスミス全体の科学的批判をも現像することだろう。

スミスの二面性はスミスの方法にねずく。その方法は歴史の矛盾をうつしだすが，不幸にも不十分なうつしだし方であった。これはスミスの矛盾の説明になろう。

ところで，評者はこうしたとらえ方よりも，矛盾の検証や指摘に注目しているように思われる。

最後に，ツアゴロフについていえば，この概要論文は，かれもことわっているように，76年６月２日，〝スミス２百年〟（200летие работы А. Смита《Исследование о природе и причинах богатства народов》）学会全国大会における報告である。そのせいもあって，論点が多岐にわたって分散し，専門家を満足させるにはいささかほど遠く，高い研究水準になることをば妨げられているように思われる。

たしかに，スミスを現代に問うこと，つまり両者の関連を求めることは大切であ

り，この点は経済学にとって最小限に不可欠な問題意識である。ツアゴロフもこの条件を充すのであるが、かれの場合どちらかといえば、現代を背景に，その異質性を強調して，スミスの特異性をうかびあがらせようとするアプローチではあっても，逆に，スミスを現代に生かす継承関係をさぐる方向をとってはいない。もっとも，この点を述べているところがまったくないわけではなく，たとえば，独古と競争，生産的労働論，蓄積，人びとの人格的自由などのスミス理論が現代どう生きるかを問うてはいるが，かれの発言が現代どのように有効かという直接の，しかも個別的な追求が大多数である。そうではなく，資本制生産の史的発展のなかをくぐりぬけてきたスミス理論のスミスらしい発展とか結晶は現代では何なのかの迫り方こそ重要である。あるいは，スミスの科学性格が現代ではどのような姿に結晶するかを，世界史的にひろくかつ迂遠に，経済思想史なり経済学史といった，史的過程のうちで確定することが大切であろう。しかし，ツアゴロフはかならずしもそういう志向を示さない。スミスの考え方や見解を歴史とはさしあたり無関係に，これを通じる濾過作業をぬきにして，社会主義経済をも含む現代の諸状態につき合わせて，実用主義的にスミスを検証する。だが，これは，十分に正しいスミス理解の方法とは，どうしてもいいかねる。

この欠陥は，ツアゴロフが国家と経済の相互関係に関するスミス見解——反重商主義・反独占の批判を市民社会の確立の論理でもってつらぬきこれでうらづける考え方——を，現代の独占や社会主義諸関係の組織に結びつけるとき，とりわけ鮮明となるだろう。というのは，スミスが現代に再生する道を切断する方向を，企図に反して，思わず与えているからだ。それは一体どういうことなのか。

ツアゴロフによると，国家を政策の主体にするのがスミス理論だったのだけれども，現代とくに社会主義経済では，これに加えるに，生産関係の主体として国家は登場する。つまり，国家が伝来の上部構造という性格のほかに，更に基礎の機能をもはたすようになったというわけである。だが，現代国家の構造性格が変化したという断定も検討していく論点で，性急に判定しえないし，スミスをこのようにみてしまうと，形式上は現代の地点に立っているにせよ，スミスにないものは何かだけしかとらえられず，発展させられる必要なものが消失し，ひいてはスミスに欠落したもの自体も批判的に理解できなくなるだろう。けだし，スミスの長短が経済学史の過程に媒介された歴史理論の局面にかかわるものとして位置づけられず，所説の結語のみがとりあげられるからだ。

たとえば，現代と結びつけるのに，第5編に注目してこれを精力的にとりあげる

のは正しい。かれは前期的独占（重商主義の経済構造・政策・思想）に反対したスミスに着目する。スミスの反独占の思想と現代独占と結びつけるのはよいとして，これを現代に適用すると，反独占＝自由競争へのカームバックとなるとみたのか，あわてて自由競争にではなく，これをこえて社会主義にいたるのだと矩絡化してかれは結論してしまう。スミスの反独占＝自由競争は，その積極的側面としての連合を形成する単位として，個人の自由を含むのであり，ただこの個人が特定の階級を連ねる代りに，すべての個人に無差別に連合が普及して階級をもつらぬくゆえに，それがなくなるとき，社会主義経済関係は成立し，連合個人の普遍的支配がここでの細胞関係となり定着する。この細胞の部分的に特殊な定着を宿すものこそスミスの強調した経済的自由主義（自然的自由のシステム）なのであるから，スミスの自由主義は現代に生きないどころか，まさに現代が求める基軸である。社会主義関係は，この基軸の無差別に（階級をなくした）普遍的な（すべての人を労働個人にする）形態であり，これを前提にしなければ成りたちえない。新しい関係のもとでは，私的自由競争は同志的競争（サレブノワーニエ）となるはず。ツアゴロフの矩絡化めいた自由主義の現代的再生という規定の否認は，史的に連絡せる過程文脈のうちでは消えさり，否認ではなく肯定こそが正しいことになるだろう。スミスを現代でとらえるべく，スミス理論とソ連の組織，とくに計画化との関連にふれた最後のくだりはツアゴロフの粗雑な経験主義，ソビエト実用主義が如実ににじみでているように考えられる。

私的関係という制約にもかかわらず，自由競争は現代にとってきわめてアクチュアルなので，この点，スミス再生のゆえんを強調すべく，以下すこしくわしく述べておこう。

独占構造は，新旧いずれを問わず，構成単位間の，大小・強弱・上下の旧身分的関係を特徴づける状態であり，いわば身分差には致命的に拒絶反応を示す資本に不合理にも再生した封建社会でありヤクザ関係であり，また内容と形式のそごした没概念であり，歴史のハレモノ形態である。ここでは弱肉強食として，小は大に，個人は全体に没入するが，諸単位には，経済的再生産の最低限は何とか保障される。独占はしたがって，連合でなく支配を，平等でなく不等を，自由でなく不自由を求め，これを不可欠の体質として他に強要する。そうでなくば，ありうる個人相互の関係や，かちとるべき生産力，わがものにできる民主主義を何がしか犠牲にする意味でも，反社会的であり，反文明的であり，反進歩主義であろう。当時（современность）のスミスにとっても，現代（современность）にとっても，独占は消去に値する。この作業にこそ現代性がある。独占は社会のもう一つの他者またはグループ

を従属させて成立し，これを培養因として自己を再生産するのであり，他者の劣悪化なり，文明を代償として，自己の支配をひとりよがりに (monopolistic) に保持する専制帝王である。

ここでは諸単位の実現する力はヒェルラルヒー型の分断のなかで未発展であるばかりか，多少実現されても，それは独占構造の維持・肥大に吸収される。だが，社会を支え進めるのは平凡多数の単位であり，どんぐりの背へらべとして，さしあたり私的形態をとるにせよ平等な関係である。したがって，個人であれ，資本であれ，上下の関係を平等な単位にうちくだくのは，スミスの時代にとってと同じくらい，現代でも必要な歴史の課題である。この個別単位はスミスの時代よりは，現代では，はるかに大きくなっている。この大小の差異は自立した個的性格をすこしもかえない。この個的単位が他の単位と平等に，しかし対象（客体）相互の関係として，（分断のなかで）かかわって，その盲目的合成結果として創者（主体）としての他の単位との関係を成立させる——これが私的所有の単位間の関連，あるいは自由競争の状態だったとすると，逆に，主体としての他の単位に，単位すべてを含む，共同関係をとりむすび，これに濾過された対象としての単位にかかわって，自覚的に単位関係を成立させるのが社会主義経済の関係である。しかし，いずれにしても，社会関係による質的差異はあるものの，連合個人を，連合した生産単位を前提とすることでは，いささかもかわりはない。

スミスの経済的自由主義が求める帰結の，現代における積極的規定とはこのようなものであり，この単位は独占と合わないばかりか，独占をつぶくべく闘争する性格をもつ。独占も競争もこうした積極的規定ではその共有者になり，現代に生きてくるし，スミスもみずみずしい現代批判の使徒となる。一般に，社会の変化は自壊を現象とするその侵蝕作用が，内生的に生ずるからあるのだが，その場合，作用は旧社会をつぶすだけではなく，新社会の条件もつくり，条件の制度化による新社会とともに，逆なものとして開花する。新旧社会を媒介するものを確定することこそ，経済学批判の，したがって人間開花を強める武器である。資本制経済についてみれば，それが新社会へとつなぐ積極的要因にして，その歴史的に貴重な遺産と残したのはほかでもなく，連合個人でありこの平等な関係である。ただし，階級別連合であり，法的平等の私的限界はもつが。スミスの自由競争の教義は現代的ににつめると，これに結晶する。資本のにつまったものだけに，これは新社会への再生にもっとも近い。連合の特定階級層ごとの差別性格を無差別なものに変革し，すべての人を連合の単位とする再逆転は，労働者階級による資本階級の再支配であり，主体に

よる客体支配の回復であるが，この再支配なり再逆転は連合単位相互間の私的性格を変革し排他性を消去して，共同性格へ転化するのと一体である。階級の消去は私有（排他）の減亡である。いずれにしても，連合を組織する個人は資本制社会で生成し鍛えあげられるというわけであり，これこそ資本の協業システムともども，資本が歴史に残した大切な所産である。この条件や関係，人や力をつくりだすべく，強力に主張してやまないのがまさにスミス理論であった。

スミスの現代的再生に関連して，〝諸国民の富〟をめぐる闘争が現代のイデオロギー闘争と不可分であるとツアゴロフはみて，スミスの長矩を明らかにする。そして科学的長所がマルクス経済学のなかに完結しているのをみるのが本論文の目的だということで，かれは終っているようだが，問題は長所を地上のものにすることではじめて，スミスが完全に生きることになるのだろうに。このあたり，ツアゴロフの高名にも似つかわしくはない。

かれにあっては，スミス理論の個別具体的な現代検証はあるが，スミスの経済学史的理解，もしくは法則論的理解にはとぼしいように思える。

〔付記〕ツアゴロフ論文は本年になってからの分であるが，旧年に執筆したこの小論に後で追加したことをことわっておく。